

小田原史談

第230号
発行所 小田原史談会
小田原市東町1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

谷崎潤一郎と佐藤春夫にまつわる人々

岸 達 志

西海子の谷崎一家

「その頃小田原に『さいかち通り』といった静かな通りがあった。両側は桜並木で溝川があり、その中の大坪さんという一軒家を借りた」(谷崎終平の記録)という「その頃」とは大正八年のこと、借りたのは谷崎潤一郎、北原白秋の世話だったという。この家は現在の市立文学館を西へ二軒先に戦後まで残っていたので、私も見覚えがある(現在の南町二一三―三十九大倉頭氏宅あたり)。

式会社の顧問として招聘され、留守がちが多かったという。もともと谷崎は大正六年、「活動写真の現在と将来」を雑誌『新小説』に発表して、作家として最も早く映画に注目した一人であった。

谷崎が直接作った映画は「雛祭の夜」「蛇性の姪」「葛飾砂子」等だったが、残念ながらフィルムは残っていない。

「雛祭の夜」は鮎子を出演させるため童話風のものであったという。この映画の撮影には、鮎子の通っていた近くの花園幼稚園の宮沢九万象牧師から、「私のところのお雛さんを使って撮ってくださいよ」と、直接お聞きしたことがあった。

藪田義雄たちの訪問

ちよūdごその頃、当時小田原中学校三年生だった藪田義雄が

文芸部員数名と教師の小林好日(よしはる)顧問と一緒に、谷崎と白秋を訪問した。おそらく新進作家として売り出した人を訪ねて話を聞こうということだったのでだろう。

ところが、谷崎は行ってもなかなか会ってくれず、千代夫人のとりなしでようやく会えたが無愛想でほうほうの態で帰ってきたという。

一方、白秋の方は歓待してくれ、お菓子まで出してくれたという。それどころか藪田少年はのちに詩人として立ち、白秋晩年に親近協力し、その伝記も書いている。

谷崎の客嫌いと女優好みはよく知られているが、この二人の作家の対照はそれぞれの人柄がよく出ていて面白い。これは藪田義雄から直接聞いた話である。小田原に住んだのは、白秋が八年間、谷崎は二年に満たなかったが、この両者がそれぞれ文学史上に「小田原事件」というのに遭遇しているのも不思議である。

谷崎と佐藤の「小田原事件」

傲慢不遜の如き谷崎とその一家に珍しく歓迎されていたのが佐藤春夫であった。佐藤は谷崎より七歳若かったが才能に溢れ、近年の交際ながら旧知の如く、

二二〇号(平成二十四年七月号)目次

谷崎潤一郎と佐藤春夫にまつわる人々	岸 達志	1
竹田長男さんの小田原	竹田長男さんに聞く	5
早川かめや旅館と谷崎先生	加藤孝子	7
小田原の郷土史再発見	嘉永小田原大地震と東海地震の津波	8
石井啓文		
旅のつれづれ俳句日記	劍持芳枝	12
根府川関所と水鳥屋	― 関所を越える話 ―	
中村静夫		13
小田原藩 浅田兄弟の敵討	『孝貞義鑑』 散策 (13)	
鈴木 好		14
初代は小田原藩の御時計師	富澤雅夫	18
遠江方面史跡めぐり	河合多美江	22
史跡めぐり案内(比叡山・湖東三山)	江戸時代の小田原宿を訪ねて	24
平成二十四年度総会講演要旨	石井啓文	25
平成二十四年度総会報告		26
落穂集・特別賛助会員		28

谷崎はその才に魅せられ、佐藤を文壇に推輓(すいばん)した。

二人の性格は表面的には違っていて、豪放と繊細、生活より芸術、散文と詩、具体的にいえば、佐藤は爽やかな性格で人好き、来る者は拒まずというひろさがあり、文化学院文学部長もつとめるといった風だ。谷崎終平は「佐藤氏は日常は親切で優しい人だった」と書いている。一般的にいえばこういう人だったろう。

しかし、内実は二人とも孤独の性格で通うものがあり、無類の友として相許すに至ったわけであろう。こうなると他にかけがえない知己となる。

大正九年十月、台湾旅行から帰った佐藤はまっすぐに小田原の谷崎の家によって滞在する。谷崎は横浜の大正活映へ行っていて留守で千代夫人等が歓迎した。

谷崎は大正四年三十歳で前橋市生まれの石川千代(二十歳)と結婚した。耽美派といわれる谷崎が普通の家庭生活に入ったのは、敬事する荷風の随筆を読んで、孤独の生活のまま高齢となった荷風の荒涼索莫たる日常を知ったからだという。

だとすると、芸術第一主義で生活は第二と自負する谷崎にとって、家庭的で従順な千代夫人

に対する身勝手な不満が次第につのり、時に暴力をふるうまでになり、それに對し親友たる佐藤が同情と愛情を抱くようになる。一方谷崎は千代夫人と佐藤の結婚を許し、自分は新しい生活を切り開こうとするつもりで約束をした。

しかし、谷崎は少しして一転、それを断った。そのため佐藤は大正十年五月、絶交状を送る。

その後、紆余曲折があったが、昭和五年八月十八日附で、谷崎千代、佐藤連名の挨拶状を出し、十年に及ぶ谷崎千代、佐藤春夫の結婚はめでたく決着をみた。

この条理を尽くした挨拶状は有名だが、世間の人はいつまでも誤解して、「谷崎さんと佐藤さんとは奥さんを交換した人なんですってと聞かれる」と谷崎終平は言っているが、社会の風潮は興味本位で話題にするので困ったものである。

小田原事件は谷崎文学の第二期の出発点

第二期の出発点

谷崎潤一郎の文学は、初期のものとして「刺青」「異端者の悲しみ」等があり、自他ともに悪魔派と称された。しかし、本質的には世紀末のニヒリズムに陥っておらず、享楽肯定的でありながら内実は常識的であり健康的であり、その為創作として偽

悪的な表現を示していたといわれている。

ところが、この「小田原事件」を契機としてその偽悪者としての仮面が落ちたというのが中村光夫である。つまり、芸術家として、順良な夫人千代を否定しようとして偽悪的に佐藤春夫との結婚を許しながら、千代と佐藤との純愛を見て突然それを拒絶し、互いの絶交となり、さらに十年も経って条理を尽くして話をまとめたりしたのは、偽悪者としての敗北を認めたのだというのである。敗北という言葉は妥当とは思えないが、東洋的風雅の趣きが谷崎の個性によって燻化され発展したというべきと思う。

その観点からすれば、この事件は谷崎文学の第二期の出発点であり、つづいて中村は、「痴人の愛」(大正十三年)をその結実として執筆しヒーローの譲治は善良常識的な青年として登場し、悪魔的なものはヒロインのナオミになり当時の風俗小説として成功し

たと云っている。

そのあと谷崎は「蓼食ふ虫」「芦刈」「春琴抄」等の佳作を生む。戦後は「細雪」「少将滋幹の母」等の骨格のしっかりし構想の大きな雅致のある名作を発表し、まさに大谷崎の名にふさわしい巨匠といわれている。

一方、「小田原事件」後の佐藤春夫は、自らの誠意と愛情が肯定正受され、大正から昭和へすすんだが、不運にも軽い脳出血



竹田龍児・鮎子の結婚式 昭和14年

前列左4番目より 泉鏡花(媒酌人)、竹田龍児、鮎子、泉鈴、谷崎、松子
2列目左より和嶋せい子(千代の妹)、佐藤千代、佐藤春夫

(写真：芦屋市谷崎記念館ニュース No. 41)

を思ったが軽快して、自己本来の道を貫いた。

谷崎は一口に、佐藤は詩人だといっている。「殉情詩集」「田園の憂鬱」は不滅の代表作とされる。詩、小説、脚本、翻訳、随筆、評論等のほか、門下三千と称され、幅ひろく才幹をふるった。それは耽美派から出発した近代的理知と美感と感覚のあらわれといわれる(吉田精一)。昭和三十九年七十二歳で急逝するまで旺盛な筆力で執筆し、門下多数に囲まれて光輝ある晩年であった。

小石川関口町の佐藤邸

私は谷崎には面識はないが、ある研究会に参加し、谷崎の最後の住居となった吉浜の湘碧山房を見学し、湯河原で松子夫人の御挨拶を伺ったことがあった。佐藤春夫は谷崎と違って講演が嫌いでないので何度か話をきいたことがあり、朴訥な話ぶりだった。あるとき、「近頃、与謝野晶子のことをしきりに思い出します」と感慨を込めて話し出され、その後、「晶子曼荼羅」を書かれて読売文学賞となった。佐藤邸(小石川関口町)の隣りが鹿島守之助邸で、邸内に社

宅があり、同級生の狩野君の父が社員で住んでいた。遊びに行くと、彼の家の二階の前が佐藤邸で庭までよく見え、千代夫人の姿や息子の方哉君がいるのが見えた。この家は文化学院々長の西村伊作建築事務所が建てたもので、今は郷里の新宮市に移築され、記念館として公開されている。昭和初期の作家の家としては最もモダンで立派なものだと思う。

中河与一

谷崎と佐藤にまつわる人については、中河与一は不可欠である。中河に谷崎潤一郎をモデルにした長篇小説「探美の夜」がある。昭和三十一年から四年にかけて『主婦と生活』に連載され、評判となり、すぐ講談社から出版され、角川



文庫にもなった。作者自身、こういう種類の小説は現存者には喜ばれないかも知れないが後にはもつと多くの意味をもつと考えていると書いている。

吉田精一はそれに同感し、作者の払った努力はその時をはじめて報いられるだろうとし、調査の綿密さは大正昭和の文学史に

重要な参考文献になるであろうとしている(『中河与一金集』月報第二号)。小説としても二人の大作家の人間ドラマを活写して興味津々と湧く大作だと思う。

中河は晩年の十年を古稀庵の一隅に建てた家で過ごし、平成六年九十七歳で長逝し、小田原市内に自ら書いた夢幻という墓碑の下で眠っている。生前親しくさせて頂きながら谷崎や佐藤についてお尋ねしなかつたのが悔やまれる。

内田吐夢

小田原で谷崎にちなむ人といえば、内田吐夢がいる。昭和四十年東映を退社した吐夢はお濠端の奥津アパート(本町一丁目二の十六)に一室



を借りた。私はある席でお会いしたが、映画人が、映画人という

のは気難しい人種だと思つていたのに、私など部外者に対しては温厚で紳士的で、たちまち親交を深めた。窓の外にはお濠と学び橋が見え、いつのまにか机の上に「飢餓海峡」の最優秀賞トロフィーが何気なく置いてあった。私は肝心のその映画を見ることがなく、目の前のお濠を見ながら、小田原は氣候がよく

住みやすくいいところですが、市もお濠の水をもつときれいにしなければいけませんね」と等という感想を聞いたり、お城にまつわることを楽しく話したのが懐かしい(今ではお濠の水もきれいになってる)。

そのうち郊外散策に私の寺に遊びに来られ、江戸時代の風情が濃く残っている山内がすつかり気に入って、昭和四十三年に「人生劇場 飛車角と吉良常」のロケをここで撮らせてほしいと言われて、主演の辰巳柳太郎がやってきて、たいへんな騒ぎになってしまった。この時のプロデューサーがお濠端の家老職で黒門のあった大久保忠幸さんだったのも奇遇というほかない。

内田吐夢は岡山の生まれで、横浜の楽器店に勤めていたが、映画への熱おさえ難く、出来たばかりの大正活映にもぐりのように入り込んで、顔見知りとなった葉山三千子(谷崎千代夫人の妹せい子)から谷崎を紹介され、映画製作の責任者のトーマス栗原に引き合わされて映画界入りとなった。そしてこの時から内田吐夢は谷崎潤一郎が生涯の師となったと話されていた。昭和四十四年、健康傾き、東京笹塚の家に帰った。内田吐夢は魅力ある人で、多くの人から敬愛されたことは、

立派な伝記が何冊もでているの
を読むと、人々が口を揃えて言
っている。(翌年八月永眠)

トーマス栗原 もうひとつ

の逸話は、このトーマス栗原と
いう監督は秦野市千村の生まれ
なのである。本名は喜三郎で、
父親の材木業の失敗により明治
三十五年十七歳の時、活路を求
めてアメリカに渡った。はじめ
は農園で働いたが、やがてハリ



ウッドに
移り、大
物映画人
のトーマ
ス・ハー

バ・インスのオリエンタルプロ
ダクションに加わり「トーマス
栗原」と名乗った。

在米十六年、大正七年帰国す
る。そして、実業家浅野良三の
資本で大正活映が創立され、ト
ーマス栗原は支配人であり総監
督となった。

吐夢は「谷崎先生は江戸っ子
で気安く、包容力があり、厳格
な栗原先生には寄り付き難かつ
たので、私たちは谷崎先生にな
つき、むしろ甘え過ぎるほど甘
えていた」と言っている。後年
の孤高超然の谷崎からは想像で
きないが、映画人たちは文学青
年とは氣質が違うので、谷崎も
気を許して共に楽しみながら世

話をしたのでらう。

一方のトーマスは、おそろし
く剛情で責任感が強く、火の出
るような稽古ぶりだったという。
大映は大正十二年に終末し、
三年間という期間であったが近
代的な映画製作を開始した画期
的な事業で、後世への影響は大
きかった。

ただトーマス栗原の晩年は不
遇であり、大正十年菩提寺秦野
市千村の曹洞宗泉蔵院に先祖の
墓を本名栗原喜三郎で建ててい
るが、大正十五年九月八日、本
牧の自宅で逝去した後の消息は
不明となっている。秦野の墓に
は納まっていない。

吐夢は厳しくこわい監督だっ
たそうだが、これは師のトーマ
ス栗原から受け継いだ根性だっ
たに違いない。

(参考)

『伝記谷崎潤一郎』(野村尚吾)

六興出版

『谷崎潤一郎伝』(小谷野敦)

中央公論社

『懐しき人々 兄潤一郎とその周辺』

文芸春秋

(谷崎終平)

『佐藤春夫論』(中村光夫)

文藝春秋新社

『吉田精一著作集』『耽美派作家論』

桜楓社

『映画監督五十年』(内田吐夢)

第三書房

『トーマス栗原 日本映画の革命児』

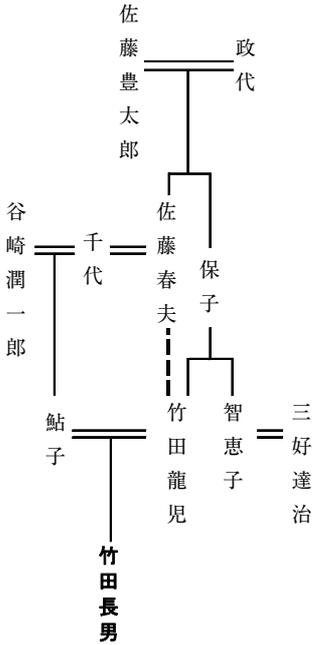
夢工房



竹田長男氏
糸をほぐすよ
うな機会にな
りそうである
場でOKした。

谷崎と春夫を爺と呼ぶ人

青木 良一



竹田長男氏の父龍児氏は
佐藤春夫の養子だった。

昨年の十月、「小田原史談」会
報委員長の松島さんから、「谷崎
潤一郎の孫に当る人に小田原へ
来てもらえるから、一緒に話を
聞かないですか」と言葉をかけ
られた。その人は植田博之前会
長の富士ファイルの後輩で竹田
長男さんというそうだ。

谷崎潤一郎が夫人を佐藤春夫
に「譲った」という出来事があ
って、その後ふたりは不仲にな
ったそうだから、谷崎の孫で春
夫の孫だということが理解でき
ていなかった。

作家のなかの作家はブンゴウ
といわれ、明治の森鷗外・漱石
のあとに谷崎の名を挙げる人が
多い。ブンゴウは怖そうで近づ
きたくないが、松島さんの「竹
田さんは谷崎の孫で佐藤春夫の
孫でもあるんですよ」という話
で、なんだかわからないが自分

佐藤春夫の詩集を丁寧に読ん
だことはないが、郷里の紀伊熊
野を描いた『熊野路』を私はた
いへん気に入っている。谷崎潤
一郎のほうも短いものを「つま
み食い」している程度。ブック
オフで見つけた文庫本『陰翳礼
讃』をパラパラめくって、「猫の
しっぽ」否「客ぎらい」などい
いなあと思っているというくら
いだから、今更遅いが竹田さん
には申し訳ない思いがあった。

谷崎を爺(じい)と言ひ、春
夫を爺と呼ぶのはどんな人だろ
うか。

竹田長男さんの小田原

竹田長男さんに聞く

小田原で就職

——(植田氏)ねえ、彼は仕事以外では余計なことは一切言わない。身の上を聞いたことがなかったよ。あるとき忽然と僕のところ来てね、「ちょっと、母の葬儀がありますので休暇を下さい」と。たいへんなことじゃない、母親の葬儀は。いいよ。

そうしたらうちにも新聞よく読んでるのがいて、「やあ、植田さん。これアレだよ。鮎子さんというのは谷崎さんの娘だよ。それが竹田さんの母親だ」と言うんだ。それまでなんにも繋がらなかった。どう見ても谷崎潤一郎とも佐藤春夫とも繋がらない感じだった。しかも彼は慶応の理工学部だし、マスターだし、なんにも文学的なアレじゃあねえし、そういう人が会社入ってくるわけねえと思っていた。それで言わないしね。

竹田 文学の分野に行くなんて考えたこともなかったですね。小学校のころから作文は大っ嫌いでしたし。姉も妹も、文学的なセンスはないですね。

——(植田氏)今日、彼にこの

本(『デジタル時代のマイクロフィルム入門』後藤公明原著編纂、竹田長男改訂編纂)を贈呈されたんですよ。

少し言わせて下さい。フィルムは、半分は消費者向け。あの半分は産業材料です。印刷・映画のフィルムはプロが使う分野で、そのうちの一つがマイクロフィルム。マイクロフィルムは段々と情報システムに化けていって、そのなかで彼が担当したのは、媒体が光ディスクに変わっていった。次はデジタルで、とったものをスキヤナーで読んでマイクロフィルムにしてそれを加工したり送ったりする時代になってきたというわけです。

——竹田さんは就職して小田原

に來られたんですね。

竹田 富士フィルムに入社して足柄に配属になりました。この頃にはもう潤一郎は他界してました(私が大学一年のときに亡くなりました)。入社数年後に結婚して最初に住んだのが板橋で、下田豆腐店が建てられた新築のアパートでした。この家に

いたころ母が訪ねてきたことがあり、西海子小路を歩き、「昔この近くに住んでいて、幼稚園もこの近くだった。場所ははつきりと覚えていないけれど・・・」と、あの辺りの町並みの様子を話していました。

——竹田さんは佐藤春夫とも、両方の血を受けておられる方ですね。お父さんは竹田龍児さん。

竹田 父は春夫の甥なんです。歴史学者でした、東洋史。ですから、父のところには書籍がとてもなくさんありましたね。収まりきらなくなつて、庭に書庫をたてたほどでした。歴史の本以外に、もちろん春夫や潤一郎の本も。新しく本が出版されると、兄弟ひとりずつにくれたりするものですから、源氏物語のように、いろんなサイズや装丁のものが出版されると、それだけで置き場所がなくなるんです。

佐藤春夫のこと

——どうして竹田姓なんですか。

竹田 竹田という姓は春夫の母

方の姓です。春夫の母親(政代)の実家が竹田で、叔母(母親の妹熊代)が生涯独身だったので、竹田の姓でいたのです。そこに春夫の弟(夏樹)

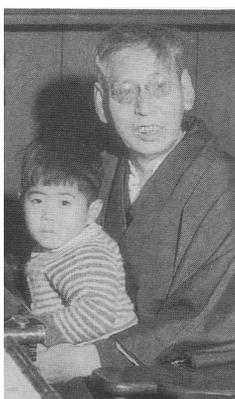
が養子に入って竹田を継いでいました。

私の父(龍児)は両親が離婚したため一時春夫の養子にはなっていたんですが、春夫・千代夫婦に方哉(まさや)が生まれたので、子供のいなかった竹田夏樹夫婦の養子になりました。竹田姓をのるようになったのです。

春夫の父の豊太郎は、新宮から少し離れた下里というところに居を構えていて、まだそこが家が残っています。戦後しばらくの間、父の母(春夫の姉)の保子と、三好達治に嫁いでいた父の妹(智恵子)一家が暮らしていました。いまは空き家になっています。

——佐藤春夫は新宮の生まれでしたね。

竹田 生まれは新宮です。生家はなくなっていますが、東京で住んでいた家を新宮の速玉大社の境内に移築して、佐藤春夫記念館として新宮市に保存していたです。



幼少の竹田氏を抱く
佐藤春夫
(新宮市立佐藤春夫
記念館だより No.2)

——一緒に住んでいたんですか。
竹田 子供の頃は春夫の家と一緒に住んでいましたし、その後春夫の家の近くに両親が家を建てたので、すぐそばに住んでいました。

——長男(なご)というお名前は。
竹田 春夫は今東光さんとも昔なじみで、お坊さんなので名前の候補を頼んだんです。それで長男とか長吉とか長助とか(長男でもないやなんですけど長吉とか長助よりまだマシだったかなと思っようなやつ)を、ズラズラと並べたのを今東光さんが書いてくれました。最終的には春夫が「長男」をえらんだんです。

——長野県で生まれたからかもしれません。私と妹の名前は春夫が、姉は潤一郎が付けたんです。

谷崎潤一郎のこと

——竹田さんは潤一郎似でしょうか。

竹田 若い頃の潤一郎にはよく似ているといわれます。母も潤一郎にそっくりでした。春夫の方は長身で、潤一郎は背が高くないですね。谷崎の家には夏休みとか正月とか遊びには行っていましたけれど、行くだけで…あの人むっつりしているだけです。ほとんど話もしないです。——谷崎潤一郎と佐藤春夫は仲が良かったけれど、「小田原事

件」のあと仲が悪くなったと思ってしまうんですが、そうじゃなかったんですか。

竹田 仲が悪くなったというよりも、よりを戻したあとは、なんとなく離れて行ったという感じがしています。

——谷崎潤一郎の作品はどう思われますか。

竹田 そうですねえ…。震災前の作品というか、昔の訳のわからない作品は好きじゃないし、『刺青』などは別として、おどろおどろしいやつが多いです。『吉野葛』あたりになると落ちていたというか、ちゃんとした作品ですね。

——ノーベル賞候補でしたね。
竹田 それ以前にも候補になっていたようですが、覚えているのは昭和四十年のことです。「ノーベル賞を受賞するかもしれないんだって」と学校から帰ってきた玄関先で妹から聞いて、驚きました。家族と皆で(松子さんからの)電話を待ってました。が、残念ながら谷崎でなく「静かなドン」で有名なシヨロホフが受賞しました。この年の夏に潤一郎はすでに他界していたのですが、このころはまだ死者には授与しないという規則はなかったようですね。

多少のことはやってます

——講演も頼まれるんじゃないですか。

竹田 講演はないですが、タモリの「笑っていいとも」とか、「今日は何の日」というので谷崎潤一郎の誕生日で何とか出てくれとか、そんなのは二、三回くらいきて、お断りして。

——人寄せに使われるんではね。
竹田 ある出版社の社長さんからテレビで水上勉さんと対談してくれといわれたり、ほかの社からも何か書いてくれといわれたりしましたがいづれも丁重にお断りしました…。ただ、全集の月報とか、そういうのはしょうがないとい

うか、お引き受けしないといけないケースもあるので、記念館の名誉館長も同様でして、多少はお手伝いをさせていたいてますけれども。

——自分のルーツに興味を感じる年齢になつてくると何か残しておきたいと思うんですが、竹田さんはどうな

んですか。
竹田 そうですねえ。じいさんにつ



左から竹田長男氏、谷崎、有多子、百百子、後列 鮎子
 (芦屋市谷崎記念館ニュース No. 26)

いては、むしろいろんな世の中に調べている人が多いですからねえ。毎日何をやっていたのかを、生きてるあいだのことをこ細かく調べたがる人もいます。細かいことまで知らなくちゃあいけないかと思いますが、感じたりもしますけれど、ちょっとね。だから、お袋の話とかそういうのは時々ちょこちょこ書いてますけど、それ以外のことは…。ね。

——機会をつくって、芦屋の谷崎潤一郎記念館にも新宮の佐藤春夫記念館にも行ってみたいですね。(二〇一二年十月十九日)

早川かめや旅館と谷崎先生

加藤 孝子

はじめまして、ようこそお越しくださいました。

私が当時のかめや旅館の四代目の嫁になります。二代目の姉の曾孫にあたりますが縁あつて嫁にまいりました。

過去のことなので祖母からきいた話になります。

このかめや旅館は明治時代に初代亀五郎がたてまして、大正のはじめに谷崎先生がいらしたころは二代目長十郎がやっております。

三代目が大正四年に生まれておりまして、二代目夫婦は大正十二年九月一日の関東大震災のときに負傷し、その後まもなくともに亡くなったそうです。

二代目には姉がおりましてので、女手で旅館を続けることができたそうです。この女将の子(私の祖母)は三代目と兄弟同様にかめや旅館で育ちました。

旅館は母屋(一部客間)を一階建て、海岸に面した客間を二階建てになっておりまして、現在の135号線はなく砂浜と直結、竹垣と築山の大きな松で区切られていました。

玄関側(現在旧道と呼ばれる)

には軽便鉄道が通り、かめや停留所があつたそうです。

当時は南町に奈良屋旅館があり、熱海にはつるや旅館と、三つ並べて呼ばれたそうです。

谷崎先生がいらしたのは、海を見下ろす二階の南向きの、朝日によく見えるお部屋でした。

先生は夕方になると、筆を休めて「天井を食べに行つてくる」とお出かけになり、今の旧早川橋を渡られて小田原の「だるま」さんまで歩いて出かけ、好物の天井を召し上がられたと伺っております。

旅館には早稲田大学の競走部が合宿をし、河野一郎さんも当時の選手だったそうで、忘れ物の洋平さんにお渡ししました。

昭和に入り戦争を機に廃業いたしました。現在は門柱とそれを繋ぐ飾りのみ面影をのこしております。

あまり思い出になるものも見つからず、お役にたてなくて申し訳ありません。

小田原の海と谷崎潤一郎

JR早川駅から海岸に向かって約五分歩くとかめや旅館跡がある。

大正二年二十八才の谷崎はここに約半年間滞在した。川西政明は『新・日本文壇史』(第一巻)で次のように書いている。

「谷崎は『刺青』などを精力的に書く一方、神経衰弱が昂じて脅迫観念に苦しめられるようになっていた。大正二年夏、小田原の早川の旅館かめやに滞在中、友人の辰野隆が訪ねてきた。その辰野にむかって谷崎はこの頃しきりに死を思っていると打ち明けてこの友人を驚かせた」

谷崎がかめや旅館から弟の精二に宛てた手紙(中央公論社刊谷崎潤一郎全集第24巻)はそのことを如実に物語っている。

「僕は親子、兄弟と云ふ血縁の關係ある者に對しては、どうも打ち解ける事が出来ない。勿論文壇の先輩後輩には猶更親しむ心になれない。：しかし今日では、友人と云ふ者も、文學者に取つては寧ろ害ありて益なき者だとしみじく感ずるやうになつた。法科の友人には尊敬すべき人物は澤山ある、さうして今でも尊敬して居る。けれどももう交際はしないやうに努めて居る。僕は當分、男の友達を持たない事にした」。

だが、谷崎は小田原の海に日夜接し、心境の変化が生ずる。同じ手紙の後半で次のように書いている。

「しかし、此の五月に早川へ来てから、幸にも讀書を始める機会と決心と根氣とを得た。今は半分忘れた獨逸語の勉強を七月以来繼續して大分語學の力がついた。少しは何か讀めるやうになつた。さうして、大分本も買ひ込んだ。これだけはお前の忠告が實行された譯であるから、喜んで貰ひたい。實は少しく大規模に文學、哲學、科學の諸書を涉獵して、来年か再来年あたりまでに、僕獨特の『藝術論』を書くつもりである。それも間に合はせなものでなく、組織立つた、系統的な、純學術的の形式を備へた大冊を編む考へで居る。此れはいろいろと内外の必要に迫られた結果で、僕は目下精力の大部分を此の方へ費やして居る。勿論創作の方も決して忽諸に附する事はしないが、その『藝術論』の出でたる後に、始めて全然(ママ)力を創作に注がうと思ふ。」

小田原の美しい海が谷崎を新たな道に向かわせた、と言つても過言でない。

松島記

小田原の郷土史再発見

嘉永小田原地震と東海地震の津波

石井 啓文 ひろ ふみ

昨年十月、本誌227号で「大久保家に御中間で仕官した滝口家の挑戦」を記した。その滝口家に嘉永小田原地震の災害記録が残されていた。

年代から六代配嶋庄兵衛(萬延元年に滝口に改姓)の執筆であるろう、表紙には配嶋氏とある。簡条書きで分かり易く書かれているので、解説文を示す。

「竹の花」を震源とする直下型?

嘉永六癸丑年 大地震ニ付荒増之手扣 二月二日 配嶋氏

紙表

一、嘉永六癸丑年二月二日巳ノ中刻(午前十時頃)、南ノ方ヨリ志んく物音響来んと思ふより大地震ト成り、近隣之住居并竹木ニ至迄大風吹来如く物音響渡り恐しきところに阿らず、一トまつ志つまりて我か家并近家ヲ見る所、様々大破ニ相成如何ト思ふうち、又々大地志んどふしてゆ

り出し、裏表に欠出し居候ハミな地に伏し、あるみ盤(は)子供并老たる者を背おふて、地にころけ様々のあり様、筆には難尽(つくしがたし)段々地震静りて又々我家近く隣家を見る所、再應之大地震ニ而所々大破何連(いづれ)も悉し、夫(それ)より志つまりたるハ云へとも、一時に六七度も常よりも強き地震ゆり出し、何分油断ならざるゆへ、畑ケあるみハ藪杯(など)ニ荊家(かりや)を作り、昼夜の差別なく住居、数十日過ても昼夜七八度も地震ゆり出し、甚常躰ならざるゆへ畑ケ藪中ニ而飯を焚、湯茶をせんじ内に居は忝人も無し、近代珍らしき事成。□□然ル處、二月十五日過し頃よりハ人氣次第ニ静り、徒婦(つづ)れざる内ニ而ハ住宅に住をこしらへ安堵のおもひをなし、潰れたる住居ニ而ハ、いまた荊家の住をして不自由の者ハ数多あり。乍去(さり)ながら廿日あまり過ると云へとも、常位の地震ハ度々昼夜に

かきらすゆり出し、常ならざる事成へし。然ル處二月下旬ニ過候処、地震静り人々安堵のおもひと□し志られける。

地震之節ヨリ之覚書
松原大明神於神前七日之間御祈禱
大稻荷大明神於神前 同断
何連(いづれ)も二月三日ヨリ被仰付候事

一、町郷所々ニ而、氏神江祈禱数多あまた有之(これある)よし

一、御城向所々大破之事
一、御天守壁落并瓦数多落候事
但し、附御天守同断

一、御多門大破、北多門潰(つぶ)れ御堀江潰落候事
但し、翌日三日八ツ時頃ニ相成、水□□地震ニ而潰れ其音御城下江響渡、人々恐き候事

一、御本丸通堀、所々壁落数多有之候事
但、其邊石垣所々崩候事
一、二ノ丸之内所々壁崩并石垣同断之事

一、御屋形之内所々大破二崩、壁崩候所数多有之、御座之間ハ御別条も無之候得共、少損之所も相見候事
一、御手道具御櫓壁崩、大破ニ相見江候事

一、赤銅(あかがね)御門、渡御櫓瓦落壁崩、大破之事
一、御番所、不残(のこらず)大破半潰之事

一、二ノ丸石垣御庭通、廿間程崩堀共々御堀之中ニ崩落、裏御門之脇石垣十五間程堀とも二御堀之中江崩落、南ノ方稽古所之向通、堀五拾間程之間御堀之中江崩落候事

一、小峯(こみね)曲輪南曲輪住屋敷向御櫓三ヶ所共壁落瓦落大破之事
一、三ノ丸内大手御門渡御櫓瓦落、御番所潰荊家板囲ニ而相立候事

一、三ノ丸御櫓瓦落、堀不残御堀江崩落候事
一、箱根口御門渡御櫓瓦落、壁崩并堀所々崩、御番所者御別条無之事
一、幸田御門瓦落堀所々小損之事。但、御番所同断

一、稽古所御土蔵瓦落壁崩、大破二相成、稽古所之内所々大破二相成潰候所茂(も)数多有之、諸稽古休ニ相成候事、其外諸役所何茂大破二相成、御普請所物置長屋類不残大破潰ニ相成候事
一、御本丸二ノ丸三ノ丸通之御堀測之芝原、不残エミハレ中江崩落候所数多有之、道中壱尺位もエミ候所、数多有之候事
一、御家中御屋敷潰之分百五拾軒程、半潰大破数多有之、諸組附小屋七分通潰、大破多分ニ相成候事

一、二ノ丸石垣御庭通、廿間程崩堀共々御堀之中ニ崩落、裏御門之脇石垣十五間程堀とも二御堀之中江崩落、南ノ方稽古所之向通、堀五拾間程之間御堀之中江崩落候事
一、小峯(こみね)曲輪南曲輪住屋敷向御櫓三ヶ所共壁落瓦落大破之事
一、三ノ丸内大手御門渡御櫓瓦落、御番所潰荊家板囲ニ而相立候事
一、三ノ丸御櫓瓦落、堀不残御堀江崩落候事
一、箱根口御門渡御櫓瓦落、壁崩并堀所々崩、御番所者御別条無之事
一、幸田御門瓦落堀所々小損之事。但、御番所同断
一、稽古所御土蔵瓦落壁崩、大破二相成、稽古所之内所々大破二相成潰候所茂(も)数多有之、諸稽古休ニ相成候事、其外諸役所何茂大破二相成、御普請所物置長屋類不残大破潰ニ相成候事
一、御本丸二ノ丸三ノ丸通之御堀測之芝原、不残エミハレ中江崩落候所数多有之、道中壱尺位もエミ候所、数多有之候事
一、御家中御屋敷潰之分百五拾軒程、半潰大破数多有之、諸組附小屋七分通潰、大破多分ニ相成候事

一、郷中之儀者東筋中筋通、人家之潰数多有之、数不相分(あいわからず)、人馬ケカ多有之候事、

但、御届書即死百五拾人、男女共ケカ人三百人余

一、町家潰家数多有之、大破半潰之家相不分候事

但、ケカ人無之候事

一、御家中江侍分潰御屋敷之分、御仁恵金式両充(つ)被下置候、半潰之分金壹両式歩充、

大破之分壹両充、御番帳外江皆潰江壹両充、半潰江三步式朱充、大破江三步充被下置候

一、郷中江無差別金百疋充、被下置候事

(注) 一疋：二十五文

一、町家江町年寄趣段金之内

二而、間口壹軒江壹両之割ヲ以出金ニ相成候事

但、町年寄金拝借之趣承り候事

一、登筋箱根二子山邊、大地震山より大盤石落石當合(あたりあり)其音山中ニ響渡、石より火出(ひいで)埃空ニ上り、空中ニ黒く相成諸人驚く事恐しき事

事二而、山より石落、四五日之間往来留り、追平より畑宿邊迄往還江大石押出し、旅人驚き諸国之評判様々恐しき事也、温泉場邊人家多潰ケガ人数しれず、土肥筋往来根府川御関所邊、大石往還江押出し

往来留り候事、近年珍敷(めづらしき)地震、昔より咄聞傳(ききつた)江候得共眼前之有様、恐しき事共也。追々往来之大石片附旅人通行相成候事。小田原旅籠家何連も数十日之間者(は)、軒端江仮家ヲ拵、旅人留昼通し分ハ、喰事杯(など)ニ甚差支(さ)しつか候事、何連も大破ニ而商買ヲ致者、無之候事

三月十三日

一、此度地震ニ付格別之御恩召ヲ以、御手元金之内百五拾疋被下置候、侍分江者高下無之三百疋充被下置候

但、御広間ニ而掛ヲ以受取頂戴

一、地震ニ付居宅破損之面々江差別ヲ以御手宛金被下置候右ニ付金式歩式朱錢三拾壹文請取候事

御雑用所ニ而受取皆潰大破小破差別有之、自分居宅大破之處之被下金受取

一、此度地震ニ付御屋敷手入為金七ヶ年賦拝借金被仰付候右何連も破損之次第二寄、差別有之候事

侍分皆潰 拾兩拝借
半潰 九兩
大破 七兩

御番帳外皆潰 六兩
半潰 五兩六匁
大破 四兩式朱余

右差別ヲ以借用願濟之上、八木(米)方ニ而受取

一、御屋敷地震ニ付大破二相成候間、七ヶ年賦拝借金四兩式朱銀四匁五分、願差出候願濟受取候事

一、三月廿一日掛り江拜借金之歎書差出候

私御屋敷去二月二日之地震ニ而、居宅向及大破二候ニ付、其節御届申上候通ニ御座候、然ル處兼々勝手向不如意ニ御座候而、何分難及自力御座候ニ付、金四兩式朱銀四匁五分七ヶ年賦拝借被 仰付候様、此度御時節柄申上候茂、恐入奉存候得共、不得止(やむをえず)事此段御内分様迄御内意願申上候

以上

三月廿一日

右歎書差出し置候處、勝手次第願書差出し可申旨、掛りより御沙汰御座候ニ付、同月廿八日願書差出し候事

口上之覺

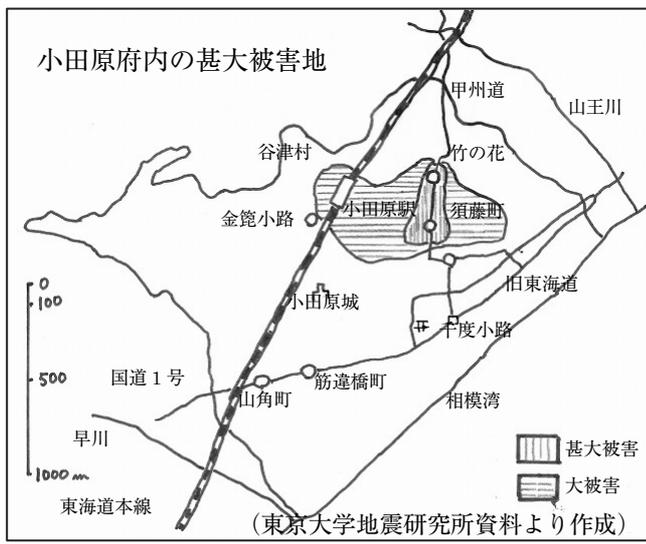
私儀兼々勝手向不如意御座候處、當二月二日之地震ニ而居宅向破損仕修覆難及自力(しりき)におよびが

たく候ニ付、金四兩式朱銀四匁五分、七ヶ年賦拝借被仰付候様奉願候

三月廿八日

右之通願書認(したため)差出申候事

一、殿様二月廿三日御着之處、御家形大破ニ相成候付杉浦平太夫殿御屋敷御仮家ニ相成、請事勤向是迄之通御家形同様破損之御見分、并六ヶ所御関所御見分被成度御思召ニ而、公義江御願之上御在国被遊候



處、夫々御見分町郷共二御見分相濟、三月廿二日二御參府被遊候事

但、御見送例年之通御家中一統罷出候事

一、殿様公義江地震二付城屋鋪并六ヶ所御関所御見分之御願去ル二月十四日出候趣見分相

濟次第致參府、平日之通相勤度由之御願御出被成候処、右之通御願濟被蒙仰候付同月廿二日御發駕

一、三月廿九日御家中一統江地震二付小家掛野宿致候二付、

氣□受候事与被御思召為氣□拂御葉煎葉五帖充被下置候事御家中諸組附迄無別条御葉五帖充被下置候

但、町郷江者一統江梅干被下置候

一、四月二日地震拜借金受取候事、但、三月廿八日歎書差出置候處四月朔日願濟之事

四月

一、今度就地震二付公義御拜借御願被成候処、御願之通壹万兩御拜借被 仰付候、

右二付御家中諸組附迄割合ヲ以拜借被 仰付候事

千石取七兩之割二而御貸附高下有之候事、

三拾石取待分壹兩貳步、御番帳外壹兩壹步、尤御長屋住居

之者江者金壹步銀五匁ツ、諸組附江者貳朱銀四匁ツ、

右之御割合ヲ以拜借被仰付候事

一、五月下旬近頃珍敷大雨三日三夜降續、大川通大水其外之川々満水二相成、堤所々崩候

田畑荒候事不少、山附人家者(は)保崩候人家潰候所数多有之候事

近代珍敷大雨二付記置候事

一、六月二日浦賀表江異国船渡来二付兼而被蒙仰候豆州下田湊江御人数被差出候事

翌三日御領分大磯濱江御人数被差出候事

但、浦賀表江四艘着船七拾五間之船式艘四拾間程船式艘、

然ル處、浦賀湊より四日朝川崎沖江乗込、江戸ニ而者双働(騒動)一通不相成、御老中阿部様浦賀江御出役被成候事

以上、嘉永六年(一八五三)二月二日午前十時頃に起きた地震の概要と、その後六月二日、浦賀のペリー来航までを記している。

特に地震被害については、小田原城内を箇条書きにして非常に分かり易く、領内郷村の人的被害も郷中の即死者百五十人、怪我人三百人余、さらに、公儀からの借金を被災者への貸付金に宛てたことも記している。

こうした嘉永地震の記録は、『小田原市史城郭編』をはじめ周辺市町史にも多く収載され、

それらを基に東京大学地震研究所がまとめた資料から、被害地図を作成し前頁に示した。

また、千度小路の質商関刀自日記には、「其時は破そん壹番竹花式番須藤町三番大工町四はん山角町筋かいはし」(明治小田原町誌)との記述もある。

こうしたことから、同研究所は竹の花・須藤町辺りを震源とする直下型地震と推定されている。

小田原地震と瀧口家文書

文化二年(一八〇五)写の藩士録に、五代配嶋好藏(後・庄兵衛)の屋敷地は入谷津袋町とあり、明治二年の藩士氏名録の七代瀧口房太郎の旧屋敷地は金篋小路とある。

文久図にも配嶋庄兵衛屋敷地が描かれている。その地を戦後の瀧口家を知る人は、現・城山中学校入口の交差点角地と言われる。冒頭の我が家での地震発生時の描写は、まさにその地である。

五代庄兵衛四代からの世襲名は、表坊主から大久保忠真の時、御右筆所書役、文政三年(一八二〇)に御番帳入御広間席、翌年、御用帳書抜取調で褒賞されているから、文筆の才がうかがわれる。

前記文書の筆者と推定される六代庄兵衛は文化六年(一八〇九)

生れであるから、嘉永地震の時は四十四才、御番帳外で格席は御番人であった(本誌27号参照)。

こうした文書を記したのは先代の指導もあつたのであろう。

中野敬次郎・著『近世小田原ものがたり』に次の記述がある。

元禄大地震で小田原城天守閣は焼失するが、この時、天守閣から大久保家宝物を持ち出したという大須賀丹右衛門他二名の活躍について、『配嶋伊信・伊盛覚書』にもこの話をのせ云々」と、天明地震の記述でも「『配嶋伊信・伊盛覚書』には、天明二年寅年七月十三日夜八ツごろ大地震ゆり候。同十五日暮六ツ時過ぎ、又々ゆり候。家中余程の潰家これ有り、御城回りも殊の外御破損、右に付公儀より御拝借金五千兩出で申し候」と、二箇所に『配嶋伊信・伊盛覚書』を記している。

配嶋家(後、瀧口家)では、諱に「伊」が多く用いられ、九代にあたる先代は伊将氏、七代瀧口房太郎が伊盛である。

とすると、六代が庄兵衛伊信ではないだろうか。この伊信が、嘉永地震を経験したことだから嫡子伊盛と共に、元禄・天明地震の記録も調べたのであろう。

寛永・元禄・天明・嘉永の地震は、小田原近辺の被害が大きいことから「小田原ナマズが暴

れた」と言われ、「小田原地震七十年周期説」が言われていた。

『配嶋伊信・伊盛覚書』は、こうしたことでも記しているのがあるのか、是非読んでみたいが、この文書の行方は分からない。

瀧口浩子様のお話によると、「父瀧口伊将が小田原郷土文化館館長を勤めていた頃、中野氏と交友しており古文書も貸していたのではないでしようか」と言われている。

嘉永東海地震

嘉永・安政期の大地震を下表にまとめた。マグニチュードは記録からの推定で、確かな数値ではないが六以上とした。

嘉永七年の③④⑤地震の後、十一月二十七日に安政と改元されたことから、この三地震を安政地震と称することも多く、わず

か四日の間に集中して起きたことから、被害もどの地震か判別し難いとも言われている。

幕末の風雲児清河八郎は、旅日記『西遊草』で、安政二年(一八五五)四月二十四日、小田原を通りかかり、次のように記している。

嘉永・安政期の大地震

地震名	発生年(西暦)月日、推定時刻	M	記事
①嘉永小田原地震	嘉永6年(1853)2月2日、午前10時頃	6.5	
②嘉永伊賀上野地震	嘉永7年(1854)6月15日、午後2時頃	7.5	
③嘉永東海地震	嘉永7年(1854)11月4日、午前8時頃	8.4	大津波
④嘉永南海地震	嘉永7年(1854)11月5日、午後4時頃	8.4	大津波
⑤嘉永豊予海峡地震	嘉永7年(1853)11月7日、午前8時頃	7.4	津波?
⑥安政飛騨地震	安政2年(1855)2月1日	6.8	山崩れ
⑦安政江戸地震	安政2年(1855)10月2日、午後10時頃	6.9	
⑧安政飛越地震	安政5年(1858)2月26日、午前1時頃	6.7	洪水

(注) 嘉永7年11月27日、安政に改元

ウィキペディアより作成

前述したように、嘉永小田原地震の被害は小田原周辺に集中していた。ところが、東海地震では、下田をはじめ津波被害が甚大であったが、小田原に被災の跡はないという。

清河はこの時、母を伴って九州から中国を経てきたのである。⑤④③地震の被害を目的の当たり

震は話に聞いていたものと思われるが、東海地震の被害のなさに驚かされたのである。

この東海地震の際、下田で大津波に襲われた様子を、ロシア使節プチャーチンと日露通商条約の交渉中であつた川路聖謨(としあきら)が『下田日記』に記している。東洋文庫版『長崎日記・下田日記』(一九八二年・発行)を転載させていただく。

川路は大久保忠真が文政元年(一八一八)に老中に就任して、勘定吟味役から抜擢し、勘定奉行筆頭になり「今太閤」とも言われたという人物である。

江戸を発ち嘉永七年十月十九日に小田原着、二十一日に三島を發ち、翌朝午前一時に下田着、稲田寺(とうでんじ)を宿舎としていた。

「十一月四日 晴

今晩九ツ半時(午前一時頃)より書物いたし、明六ツ時(午前六時頃)前よりからす鳴くまで、再び臥し候て、支配向と御用談いたし居りながら食事中、五ツ時(午前八時頃)過、大地震にて壁破れ候間、表の広場へ出る。生れて初めての事也。寺の石塔、其外炯籠(とうろう)等みな倒れたり。間も無くつなみ也とて市中大騒ぎ也。中村為弥来り、早々立のきの事申す也。支配勘定上川伝一郎先立いたし、御普請役其外ま

で書物を携え、近習・中小姓一同にて六・七町ばかり逃げて、大安寺山へ四分通り上り見居り候処、はや田面へ潮押来りたり。

間も無く市中土煙けむり立ちて、けしからず騒ぐ也。火事かと思ふ間に大荒浪(あらなみ)田面へ押来り、人家の崩れ、大船帆柱を立てながら、飛ぶが如くに田面へドツと来たる体、恐ろしとも何とも申すべき体なし。其時居合せ候もの共大勢、思わず茨(いばり)をわけ、木を伝いて道なき山をひら上りに上りたり。絶頂へ参りみれば、手足をかき破りて血の出ぬという者なし。ここ

には、女其外逃上りて、みな念仏を唱え、或は泣き居たり。やや静まりたるけしき故、下らんとするに少も道なし。村人をして道案内させたるに、ここにも道なし。(中略) 絶壁屏風の如く画がける鶴鳥(ひよどり)越よりも甚し。いかに上りけんと同再び驚きたれど、致し方これ無し。漸く三町ばかり下りたるに(此間、何度も道を替え、其苦さいうべからず) 袖(そで)まの跡を見出し、夫ぞれより四・五町下りたるに、松村忠四郎(勘定役、妻佐登子の弟)尋ね来りたり。逢見て互に涙ぐみたり。

(後略)

道なきところを夢中で登ってきたという。津波の恐ろしさが実感され、即刻の高台避難が人

命を助けたことがよく分かる。宿所であった稲田寺には、ここにも登場した中村為弥(勘定組頭)の建てた「つなみ塚」が現存しているという。

次いで、四日後も転載する、「(前略)○江川太郎左衛門手代来たりて、地震は東は箱根より西、沼津・原・吉原にいたり潰家多し。夫より西も弥甚敷き風聞承り候由、これを申す。下田近辺、太郎左衛門御代官所、地震つなみ強く、口野という所より土肥村迄、太郎左衛門御代官所十四・五里の所、流失家・死人多くこれ有り候由、これを申す。○昨夜、四日に江戸より帰りたる者の咄にては、地震江戸は子細もなき由。去り乍ら、松村忠四郎・箕作元圃(阮甫)は類焼いたし候哉に相聞く。火水のたたり、扱々気の毒也。○九ツ時(正午)頃、船便昨日御届きの由にて来る。江戸の地震、いろ／＼と申居り候処、委細相分る。御両親様御別条在らせられず、おさと御介抱も相替らずの事ながら行届き候様子、大慶。おさと持病案事居り候処、起き候由に候得共、認(したため)ものも出来候由、安心。孫共無事、是又安心也。(後略)」

ここでも、箱根以西の被災が記され、小田原は何事もなかったのだから。これも想定外の

自然災害であろうか。それにしても、江戸の留守家族を心配する川路の人柄が滲み出た記述である。

後記

嘉永・安政期の大地震を表にまとめたが、②伊賀上野地震から⑧飛越地震までを一連の地震と見る説が言われている。

嘉永小田原地震をその前兆と見るか、いづれにしても、嘉永六年から安政二年の三年間に集中して推定マグネチユード六以上が七回も続いた。

東日本大震災の余震は最低三年、安政飛越地震を考えれば、さらに三年は要注意である。

川路の『下田日記』には、余震の記述も少なくない。それを記す紙面の余裕はなかったが、下田停泊中のロシア使節のディアナ号は、津波で船底が損壊、その修理のため戸田村に移動中に座礁、転覆してしまった。川路たちは、ロシア側の要望を入れ、伊豆の船大工たちを戸田に集め、帆船「ヘダ号」を建造、プチャーチンたちロシア使節を無事、帰国せしめた。こうしたことも『下田日記』に詳しいが、吉村昭・著『落日の宴』が読み易くお勧めしたい。

旅のつれづれ俳句日記

剣持芳枝

ある初夏の日、かねて山梨県石和温泉のホテルに予約してあったので、友人の車に同乗させてもらい出かけることになった。涼しい風が心地よい窓辺に外の景色を眺めているうち、山中湖にまたたく間に着いた。富士山に一番近い湖と言われるそうだ。近くの花の都公園に車を止め、外に出て爽やかな空気をいっぱい吸った。この公園は花と人間、花と自然がテーマで四季の花や植物に関する情報が溢れていた。広場の木陰で手作りのお弁当をいただき、お腹がよくなったところで昇仙峡に行ってみることにした。

初蝉や大きな石に腰おろす

昇仙峡口バス停にはトテ馬車の馬が、人待ち顔で立っていた。馬車の発着所を過ぎるとオットセイ岩や、トーフ岩などの奇岩が現れ河原に下りられる所もあった。トテ馬車の水飲み場を過ぎると白くそそり立つ、岩峰覚円峰が見えてくる。その巨岩の頂上で覚円と呼ばれる僧が悠然と座禪を組んで修行したという言い伝えを聞き、今更のように昔の僧侶の立派な行動に身の引き締まる思いだった。

万緑や板一枚の橋渡る

日暮れにはまだまがあるもので、近くの影絵の森美術館に寄ってみた。影絵の巨匠藤城清治展でテレビではよく見たことがあるが、光とファンタジーの世界に引き込まれるようで、童心に帰ったような心地さえた。お茶をご馳走になり、係の女性とのお話し合いが楽しかった。館内の売店でハンカチなど買い、手を振ってお別れした。私は近所の土産物店で欲しかった印伝の小銭入れを買った。

滴りや甲斐路に多しそば処

そろそろ夕暮れも近く、素晴らしい渓谷美を満喫した私達は車を石和温泉へと走らせた。ホテルに着き部屋に案内されると一日の疲れがどっと出た。この温泉はトルマリンの成分が体にはいいそうで、ゆったりと体を休めた。夕食には甲州名物のほうとうもいただき、女性三人おしゃべりのあと眠りについたのである。

根府川関所と水鳥屋

— 関所を越える話 —

中村静夫

これからお話することは私の想像も入った話で、いくらか曖昧なところもあるかも知れませんが、お許し下さい。

清河八郎の旅中記『西遊草』(平凡社東洋文庫)に幕末(安政二年七月)、母を奉じて西遊した清河八郎が関所を通らず抜けた道をした話が出てきます。

「十九日 (略) 気賀という所に新井の裏番所があつて女子を取り調べて通さない。それで舟を雇い浜名湖を密かに渡り、呉松という所にいたるのである。けれども夜中でなければ舟が出ないから、しかたなく午後二時

本稿の筆者である中村静夫さんは本年五月に歴史地理学会功労賞を受賞されました。「小田原史談」への投稿に感謝するとともに、今回の受賞を心よりお喜び申し上げます。



過ぎだが宿をとる。三日美(三ヶ日)は新井から五、六里ばかり入りこんだ所である。新井宿は昨年の津波ですっかり破損し、堤防も切れ、番所もつぶれ、入り海も五、六尺深くなり、潮の具合も大そう悪くなった。(略) 一体女子をこっそり渡すのだから船頭たちは何事につけても無法の言葉を吐き散らし、呉松までわずかに二、三里の所を五里と言ひ、一艘で金一分などと言うので、隣座敷の名古屋の男女が私たちの座敷にやって来て、特別多く金銭を出すよう押しつけた。それで私たちは陸を行こうと話し合ひ、一度はそういうことにしたのだが、とうとう船頭を一人にし、銭一貫文と約束する。女連れではどこでも無理なことを言いかげられるので、よほど気をつけないと侮りを受けることになる。

二十日 午前零時過ぎ船頭がやって来て舟を出すという。それで皆目をさまし食事をとり、静かに舟に乗る。屋根のない小舟で天を仰いで星の宿りを眺めるとして。夜なかのことだから

ら皆ぐっすり眠りこんで、舟の中では言葉を発する者がいない。また舟路の景色が少しもわからない。「呉松に着いたぞ」との船頭の呼び声でどの人もはっと目を覚まし、上陸した。野原に一軒家があつて、もう夜明けになっていた。」

それからもう一つ。その後、清河八郎一行は箱根に来ます。ここでは関所を通って行きます。「湖岸をたどっていくと箱根宿がある。人家が続いているが地震で十中八、九軒破損し、本陣などまだ普請ができあがつていない。もう夕暮れ時になったのでここに泊ろうとしたが、前に関所があるから少し進んで越えておこうと思ひ、客引きどもが捉える袖をふり切つて関所にいたる。湖を後ろにし山を前にして木々は高く茂り、寂しい有様で飛ぶ鳥でなければ越えることができない。ここは、小田原城主大久保家の預り地で、往來を嚴重に取締り、天下第一の厳しい関所である。女子は江戸から上方に上るのを取り調べ、道中手形がなければ決して通さないけれども上方から江戸に下るには、ただ名前を告げるだけでよい。初めてこの関所にいたる者で恐れて身の毛が立たない者はない。関所を越えると、ほどなく人家がある。ひそかに関所

を越える者を手引きする所だという。」

これは新屋町だと思ひます。箱根宿の東に関所があつて、新屋町はさらのその東です。「ひそかに関所を越える者を手引きする所だという」とあります。

ところで、根府川の関所でも関所を抜けることが想像されず。関所の手前は石橋です。石橋あたりから舟にのつて関所の沖合を通り岩・真鶴あたりに着くというものです。そういう噂が私の耳に入っております。また、旅人の胴巻きを取り上げた話も伝わっております。そういうことと旅籠水鳥屋(小田原史談)第229号)の關係はよくわかりませんが、旅人と旅籠との関わり具合は今となっては闇の中です。しかし、箱根町の新屋町の家が「ひそかに関所を越える者を手引きする」ことをしていたことを考え合わせると、熱海道への入り口の旅籠水鳥屋が、私の想像では「手引きしていた家」として浮かび上がってくるのです。

因みに浜名湖の三ヶ日・呉松間は二・五里で、石橋・岩の間は二里です。

今回の話は曖昧なところがありますけれども、事実そうということがあつたらうと考え、敢て申上げました。

小田原藩 浅田兄弟の敵討

『孝貞義鑑』散策(13)

鈴木 好こう

代官

近世初頭には、神奈川県域内に小田原藩が持つ藩領は足柄上下二郡だけで、あとは幕領(天領)と旗本領であった。上郡の八か村には天正年間に五名の旗本が配置された。

江戸幕府のある関東地方に天領が多かったのは当然である。幕府は重要な地域を幕領とした。東海道を始めとする主要道路、大阪、京都、長崎など重要な都市、伊豆、佐渡などの鉱山、県内でいえば鎌倉を初めとする有力な寺院、漁業と交通の要所である三浦郡、農業生産力のある酒匂左岸の村々、平塚、馬入、須賀などの交通の要点は天領とした。

幕府の代官は勘定奉行の支配を受ける。一か所が大体五万石程度の幕府直轄地の民政を預かるが、主たる任務は租税の取立てである。十万石以上の天領は

郡代が支配する。幕末には、十二国にわたって四十九人の代官がいた。

代官は、秋になると村々を視察して収穫量を査定し、貢米を増減した。五公五民が標準であった。その実務を果たすのが手付、手代である。代官所を「陣屋」と言った。陣屋には手付組(三十俵三人扶持)と、手代(二十両五人扶持)が十人、書役(五両一人扶持)が二人。手付、手代のほかに、侍、勝手、賄い、足輕、中間など、合計三十人ほどが働いていた。小田原藩が番城制となった期間は小田原は幕府直轄地となり、小田原代官が置かれて民政に当たった。番城制は、寛永九年(一六三二)稲葉氏が入封して終わり、その後大きな変動はなかった。

伊奈忠次

有名な代官伊奈忠次は、秀吉の小田原攻めの

とき家康の下で交通や兵糧輸送を担当して、拔群の働きをして秀吉の眼にとまった。家康は、関東に移されると伊奈に一万石を与えた。

忠次は「関東郡代」になって関八州を支配し甲州の代官も兼ねて、合わせて約百万石の天領を支配した。

関が原の戦でも兵糧輸送に目ざましい功績を挙げて、備前守に任ぜられた。

太閤検地に際しては、大久保長安、彦坂元成と共に奉行をしたが、彼の流儀による検地は備前検という。彼の手になる土木工事は備前堀、備前堤の名で残っている。

伊奈家は以後百五十年にわたって、代々代官を勤めたが、寛政四年(一七九二)忠尊が蟄居を命じられて以後、関東郡代は廃止された。

代官町

神奈川県内に代官の名の付く地名がいくつかある。大和市福田の代官は、小田急「高座渋谷」と「桜ヶ丘」の中間西側で、中原街道が南に湾曲して通っている地域である。寛永十一年(一六三四)天領となり、十七年には旗本領になった。代官庭八幡社がある。

横浜市中区元町に代官坂がある。

茅ヶ崎に代官町がある。JR「茅ヶ崎」と「辻堂」間の、国道一号とJR線に挟まれた地域で、宝暦十二年(一七六二)天領になった。

平塚の代官町は、須賀村代官町とも馬入村代官町とも言われたように、その地域は、JR「平塚」東南地区で、馬入、須賀、平塚新宿の一部から成る。かつて、「だいかんば」と呼ばれる代官御林があった。天領となったのは天正十八年である。

前号までの章 (太字は今号掲載)

序章

- 第一章 時代背景
- 第二章 事件発生
- 第三章 敵討出発まで
- 第四章 諸国を巡る
- 第五章 江戸へ帰る

今号

- 第五章 江戸へ帰る (途中から)
- 第六章 万助水戸へ (途中まで)

次号以降

- 第七章 浅田兄弟水戸へ
- 第八章 本懐を遂げる
- 第九章 小田原へ帰る
- 第十章 浅田家の系譜

小田原の代官町 小田原

の代官町は本町三〜四丁目。千度小路の西で東海道に並行する脇町。北条時代は代官小路で、貞享二年(一六八五)にはすでに代官町と呼ばれていて、この名称は明治八年まで続いた。

町内の徳常院(曹洞宗)は、千度小路浜を中心に毎年七月十六日、浜施餓鬼を施行する。浜辺に一〇八本の松明を立てて海難者を弔う。

徳常院にある二メートル四十センチの地蔵は、もと箱根芦ノ湖畔の賽の河原にあった。明治維新の廃仏毀釈で箱根権現から買った商人が、外国人に売るために小田原まで運んできた。袖ヶ浜から舟で江戸か横浜まで運ぶつもりであった。しかしメドがつかず放置されていたのを山田又市が買い取って徳常院に奉納したもの。(『小田原近代百年史』)

『万屋九兵衛の母』に「代官丁(小田原)の千度小路で…」とあるが、千度小路は代官丁の中にはない。

松原神社の祭礼は一月十四、十五日。なお七月二十六日には浜辺で線香祭を催す。線香でぐるりと囲まれた中で食事をして夜を過ごす。

小田原の代官たち 代官

町には、天正六年に移住してきた芦川半左衛門の豪壮な屋敷があった。彼は初め北面の武士であったが、浪人して小田原へ来た。天正十八年、家蔵の茶壺を東照宮に献上したので、持家、持地の諸役を免除された。天正二十年頃の彼の屋敷は九間・廿間で、通小路にも一丁田の小笠原町(唐人町らしい)にも屋敷を持っていた。

『相模国風土記稿』に、「寛永譜曰く」として、八木次郎左衛門重明が小田原の代官を仰せ付けられた。恐らく慶長十九年より元和五年までで、「小田原が番城たりし頃なるべし」とある。

足柄上、下両郡は北条時代から「にしごおり(西郡)」と呼ばれていた。稲葉氏支配の頃西郡は、東筋、中筋、西筋に分かれ、国府津側が東筋、酒匂川西岸と北部が中筋、早川から箱根にかけてが西筋で、それぞれの筋は代官が担当していたが、彼らは小田原城下において、時折回村していた。

宝永四年(一七〇七)の富士の噴火後、足柄上、下、駿東郡の藩領が幕領となり、享保七年(一七二二)まで幕府の四人の代官の支配を受けた。

小田原藩では「御番帳外」の小役人として足軽並の五石または七石二人扶持の「山代官」や「浦代官」もいるから、代官という職の内容は広い。

千度小路 代官町の東側の、東海道に並行する脇町。東は高梨町。武家地ではないのに「小路」の名が残った小田原唯一の例。明治生まれの人はセンドコジと呼んでいた。

地名の由来は、船方村が船頭小路となりさらに千度小路に転訛したというが、これはおかしい。「船頭」小路の使われた事例があるかどうか。

千度小路は漁師町である。船頭は文字通りには船手頭であり船の長である。または船を漕ぐのを職業とする人である。漁師とは違う。

この「千度」は、社寺に祈願を込めるのに千度詣でる「千度詣」からとったものであろう。地内に船方大明神(松原神社)がある。

第六章 万助 水戸へ

牢抜けをして、縁故をたよりに江戸の湯浅惣蔵を訪ね、彼の助言で川越に出掛ける前に、小田原にいた頃言い交わした仲のおゆくに会う。おゆくに惹かれた万助が、たばこやの手伝をし

ているうちに月日が経った。

惣蔵が来て川越行を勧めるので、おゆくと別れて川越に行き、ここでも煙草屋の手伝をする。名を九兵衛と改めた。

しかし川越も江戸に近いので不安になり、水戸へ行き、そこで信用されてたばこの店をひらかせてもらい、女房も貰って商いも繁盛した。

『磯濱村祝町の仇討ち』によると、万助は下野国鬼怒川在の寺の住職をしている伯父を訪ね、そこで剃髪して二年ほどひそみ、文政四年十一月頃那珂珂で店を借りた、という。

万助が牢抜けしてからの行動は、彼自身ひとは話さなかったことは当然である。水戸で身を固めたあとでも、妻にも自分が小田原出身だとは話していない。十数冊ある文書の中で『小田原藩士仇討細書』にだけ、妻里んの口書があるが、それによると万助は、自分は真壁郡の出身であると。真壁郡は茨城県西部筑波山の西麓で、笠間藩領として栄えた。

万助はなぜ真壁郡の出身と偽ったのか。ことによると万助は、脱獄して逃走してから真壁郡に来て、ここである期間過ごして

土地勘を持ったのではないか。

六才の時両親とともに江戸に出て、「武家奉公相勤め」「大坂へも御供二而罷登」ったことがある、そして「傍輩を請暇御座候」と。これでは意味がとれない。

これは、万助は自分から、「傍輩只助を殺害し、入牢し、牢抜けした」とは言えなかったから、傍輩の誰それを傷つけたので浪人することになった、という意味ではないか。

一、牢抜け

先ず、

「浅田只助を殺害せし迄は本心に有しが 捕らわれしより狂気いたし」

については真相が不明で、「三十日程も立ちければ夢の覚めしごとく本心に成り」にも確証は無い。牢抜けした月日も季節も不明。(公文書では二月)。ただ、夜中小雨が降っていた、というだけ。続いてこういう記事になる。

我が旧家にたより裏口よりそつと入りまづ裕とひとえ物を着し脇差刺と有合せの金子三分懐中いたし小田原ちようちんをもち食事をしたため：懐中よりかみそりを出し自ら月代をいたし

我が旧家という足輕の組長屋であろうが、万助の母は万助の入牢後も足輕長屋、いわば官舎に居住を許されていたものか。恐らく彼女は、直ちに長屋を出されて、身内の所に身を寄せたと思われる。また、藩としても空家のままにして置くとも思えない。

万助が入牢中も母親がひとり、そこで暮っていたと仮定して、長屋の裏口から入っても気づかれなかつたらしい。裕や単物、脇差、金、小田原提灯が、彼の逃走を待ち構えたように準備されている。万助は、食事迄済ませて出掛ける。そして剃刀も持って、道の脇に隠れて自分で月代を剃る。……こんな事ができるであろうか。

平成の現在と違って、飯がいつでも食べられるようになっていたとは思えない。これは二月のことというから今なら三月。余った飯があつたとしても、寝ている母親のそばで悠々と食事をすましたとすれば、その度胸、落ち着きに圧倒される。

それに、月代は鏡も持たずに自分で剃れるものなのかどうか。分からぬ事ばかりだが、とにかく万助は無事に江戸まで辿り着く。

さかやき(月代)

月白とも書く。逆気(さかいき)の音便。剃刀で剃るのは、室町時代から。出陣の時にこれを施し、戦いがすめば伸ばしたが、戦国時代以後常習となった。

武士が兜をかぶる際のほせを防ぐため、髪を切つたり抜いたりしたのが始まりで、綺麗に切つておくのが礼儀であつた。正徳六年(一七一六)、大名、旗本が月代を剃るのが許可になった。そのうち一般庶民も月代を始め、切らずに伸ばしているのは、浪人、非人、伊達者、などであつた。伸び放題にして後ろに垂らしたのは、老人や公卿、山伏、学者、医者、人相見など特殊な人たちであつた。

ただし、江戸時代の武士は髭は伸ばさない。大ひげの禁止令が四代將軍家綱のときに発令されている。然し幕末ともなると浪士が増え、不精髭を生やすものも多くなつた。

明治時代の官僚や学者が髭を伸ばすのは、ドイツのカイゼルとの真似である。もつともヨーロッパでは一八七〇年代には髭がはやって、ハーバード大学の学生は全員顔のどこかに髭を生やしていたともいうから、漱石や鷗外の髭は、こつちの系統かも知れない。

万助の逃走経路は、小田原―曾我山―厚木―八王子―四ツ谷―鳴子―江戸ということになる。ここで鳴子というのは、成子坂のことで、新宿駅西側から中野区境の淀橋方面へ下る、松柏が茂つた険しい坂で、南方に鎌倉街道が通じていた、という。成子の名は、坂の南側にある成子地蔵にちなむ。なお、門に鳴子をつけた「鳴子酒屋」があつたという。

万助の頼つた惣蔵は万助の姉婿の弟で、先年発生したある事件で、永のお暇を賜つた十一人の一人だという。その事件が何であつたか、肝心の五、六字が、原コピ―に欠けているので調べようがない。惣蔵は江戸で渡り侍、すなわち、一季半季の雇われ侍になつて、糊口をしのいでいたのだろう。

二、江戸の万助と鉄蔵

惣蔵の助言に逆つて、万助は江戸に落ち着く。小田原にいた頃の言い交した女に会つたからである。その女の名はおゆく。小田原の代官町の丑右衛門の娘で、万助が事件を起し入牢し、脱獄して逃走したので、世間の目を考えて江戸の肴屋彦兵衛方に預けられていた。しかし、預かつた彦兵衛も彼女の処置に困つて、

富岡屋という売女屋に奉公に出して来た。そこに万助が尋ねてゆき、結局富岡屋の近くのたばこ屋の手伝いをしながら、

おゆくが方へおりおりかよひ互に心をはこぼしけりという事になった。

「互に心をはこぼしけり」という表現は、節度と奥深さのあらい言葉である。

深川蛤町

浜十三町の一つで、現在は江東区永代二丁目。海辺新田のうち。蛤などの魚介類を取って商売する者が多かったから来た地名という。化政期、家数五六五軒。

櫓下裏裾つき

富岡屋のある山本町は現在江東区三好二丁目・平野二丁目のうち。木材問屋の材木置場が集中していたので「木場」といわれていた。

櫓下は山本町の岡場所の俗称で表櫓ともいい、裏櫓、裾継とともに三櫓と呼ばれ深川七場所の一つ。

寛政頃の瓦版らしい『山下八景』の、こび八と三蔵という名高い豆蔵の掛け合いでやる落咄に、

こび「おれはげいしやだ、三「げいしやはどこでした、

こび「おれは深川、

三「ふか川はおもてやぐらか、うらやぐらか、こび「いんにや火の見やぐらだ、とある。(鳶魚『滑稽本概説』)

村松町

現在は中央区東日本橋一丁目。もと西本願寺の末寺があったが、明暦の大火後寺が移転してから町屋になった。子供の祝い事などに用いる飾り太刀を売る店が多く、「村松町のなまくらや」として有名だった。町の賑いは隣接する橋町に次いだ。

富岡屋は裾継の売女屋の一つだから、おゆくはここに売られて売春婦になったともとれるが、どうも彦兵衛の立場や、万助と連立って万助の働き口の世話を頼みに行ったり、さらには道具屋松五郎の嫁になるところからすると、女中奉公ととつた方がよさそうである。

ところが『警撃実録』ではこの女はズバリ深川の女郎である。鉄蔵は休日を利用して確かめに行つた。道具屋の隣が餅屋で、その主人が丁寧に、あの女は女郎だったが、運良く道具屋に落籍されたと教えてくれた。場所柄を考えればこの話の方がずっと自然である。

お知らせ 次号(二二二号)より「小田原史談」の文字サイズを大きくし、併せて紙面をA4版とします。詳しくは今号同封チラシを参照下さい。

ちんこ切

賃粉切り、つまり煙草切りのこと。葉たばこを手間賃を取って刻み、または小売りする商売である。

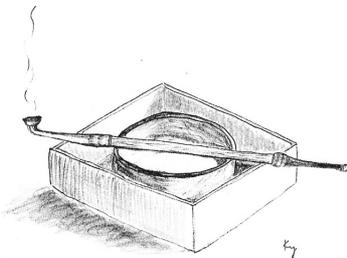
たばこ刻みの基本作業は夫婦でやる。女房が葉を数枚重ねて十センチ巾ほどの薄い巻板に巻く。主人は切り台の上で巻板を抜き、葉を押さえる駒板を巻葉の上に置き、小口から包丁で刻む。この作業を「カカア巻きトウ切り」という。

吸殻を じうと言わせる

ちんこ切り

(雑俳・柳多留三)

つづく



新会員紹介

島田卓司

小田原市城山三七四五

TEL 〇四六五三五六二二六

岩城豊雄

小田原市南鴨宮三二七二二

TEL 〇四六五四七九三三七

濱村哲夫

小田原市曾比三二一〇一六

TEL 〇四六五三六七七八五

西条博之

小田原市曾比三二一〇一六

TEL 〇四六五三六六九〇六

会員の方へお願い

—新規会員募集—

小田原史談会では常時新規会員を募集しております。郷土の歴史に興味をお持ちの方に是非会員になっていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元です。

小田原市堀之内三二一―五

植田土郎

TEL 〇四六五―三七七―七八八

小田原の老舗 富澤時計店

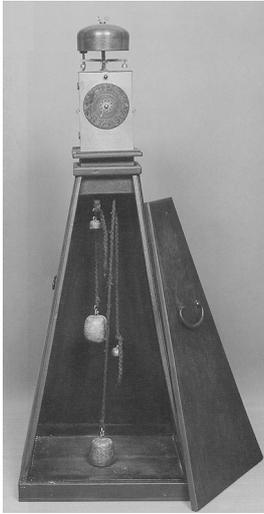
初代は小田原藩の御時計師

富澤雅夫

初代は川越から来ました

富澤時計店の歴史ですか。初代が真水(しんすい)、二代目真吉、三代目元平(私の祖父)、四代目が三郎(私の父)、私(昭和二二年生)は五代目です。

私の父は三男でしたが、長男と次男が早く亡くなったので時計屋を継いだんですね。その父も昭和六三年に亡くなり、その後私が跡を継ぎました。今年九四歳になりました叔父(富澤芳郎)は修理専門でやってたんです。二階で仕事してまして、忙しければ下に降りてきました。初代の真水は小田原藩の御時計師として安政年間に川越から来ました。どういいういささつで



大名時計

て燃えてしまったと聞いてます。川越から小田原に移った時は、この場所ではなく別の場所、銀座通りに三橋仏具屋さん近くの仕舞屋

(しもたや)で、ちよこちよこと時計を直していたらしいですよ。

二代目真吉から「民賞堂」

この場所が二代目の真吉が店を構えたのが明治一八年(一八八五)です。「民賞堂」というのが店の名前だった。だから真吉が富澤時計店の創業者です。

明治の頃は、時計屋さんというのは随分ハイカラな商売でした。時計なんか持っている人は少なかったからですね。あの頃はみんな懐中時計でした。

富澤時計店が小田原の最初の時計店と聞いてます。井細田に本多さんという店がありますが、あそこがちょっと遅いんじゃないんですか。井細田は昔の甲州街道で、銀座通りや緑新道よりは賑やかでした。本多さんは私の祖父元平と親しかったし、父親どうしが同級生、それで息子さんと私が同級生です。

三代目元平は

時計修業で米国へ

元平は面白い人で、我が家の「中興の祖」なんです。非常に向上心があった。若い頃から勉強もしたかったらしいですね。

もともとは農家の出身でしたが、機械ものが好きで、技術を習得するのが好きだったらしい

です。

どういいうわけだか横浜で修業をしていて、うちで婿さんを探しているっていうんで、そういうルートで小田原に来たんです。だから元平は養子です。

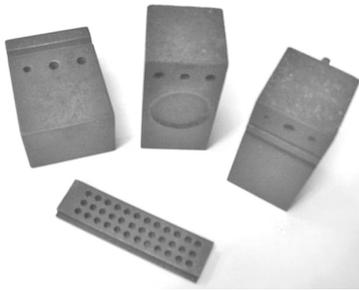
どうしてもアメリカに「武者修業」に行きたかった。曾じいさんの真吉に店を任せてね。

最初はなかなかビザが取れないんで密航したけど、捕まっても願わず。しかしそれに懲りず、二度目の時(明治三八年頃)には、当時横浜で警察官をやっていた元平の従兄弟に頼んで正規にアメリカに行ってるんです。

行き先はサクラメントでした。アメリカの中でもサクラメントに時計屋は多かったのじゃないかね。アメリカでは職人、丁稚として時計修理の修業をしていました。

アメリカが時計の本場だった

あの頃はアメリカが時計の主だったんですよ。ウォルサム、今でもありますね。それに会社はスイスに移っちゃいました。がロンジン、それから今の会社と全く違いますけどエルジン、今は安売りでやっています。タイムックスもありました。懐中時計の蓋に馬のひずめが刻印されてました。昭和四〇年頃の話です。



3代目元平が米国から
持ち帰った時計修理用治具

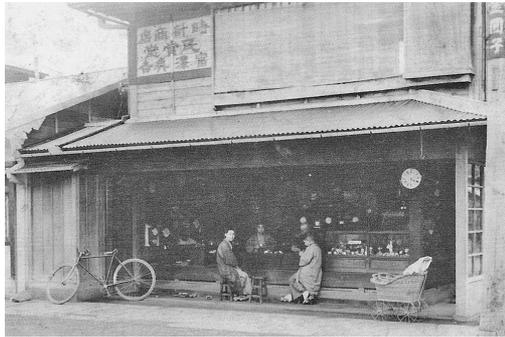
ゼンマイ時計はスイスから来てアメリカで広まりました。あの頃はスイスもやってましたが、アメリカほどやってません。それにスイスなんかは修業に行けませんからね。

これが元平がアメリカから持ってきた時計を修理するための道具です。貴重品です。

祖父の腕は確かだったらしいです。叔父に言わせると、「とにかく俺が脱帽するぐらいの技術力を持っていた」らしいですよ。

父も元気なころ「一度親父が行ったところに行ってみたいな」と云ってましたよ。私もサクラメントっていうのは名前も場所も知らないんですよ。

元平が米国で武者修業している明治四四年(一九一一年)に、長男が四才で亡くなっているんです。馬力に轢かれて亡くなりました。それで元平は米国から急遽帰って来た。だから三、四年



元平が初めて今の場所に店を構えた

米国で修業していたことになりました。

大震災と強制疎開と

明治三八年(一九〇五)に、元平がこの場所(小田原町新玉三―五―二)現在の栄町一―七―一)に百坪の土地を求めて店を構えたんです。

これが元平が作った店で、左上に「民賞堂」の字が見えますね。真ん中に座っているのが元平です。このころから職人さんを使っていたんですね。叔父は、この乳母車は叔父の弟の隆(大正十年生まれ)が使った物ではないかと言ってます。ところがこの建物は、大正一二年(一九二三)の関東大震災で壊れてしまったんです。



昭和3年の建物

震災前は前の通りは狭くて曲がりくねっていた。それで震災後に広くきれいにしたので「緑新道」と言っているという話です。その頃、叔父の子供が馬力を引くのを手伝っておにぎりを貰ったとかという話を聞きました。この道(緑新道)を広くするんで店の土地を取られたと聞いています。

これが昭和三年に作った建物です。コーナードウにあるウインドウは元平が附けた物で、元平はこれが好きだった。しかし、この建物も昭和二十年(一九四五)の八月十日に強制疎開で潰されてしまった。強制疎開で軍用道路として取られたのは横断歩道(伊勢治方面)側、新開地へ向かう道です。昔からあった道です。

本当はね、これは父とか叔父から聞いた話だけでも、反対側(伊勢治側)を壊すつもりでした。ところがそつちは寺が四つあったらしい。山王の手前に二つ、それに本源寺があるので、



昭和25年(1952年)に再建した建物

それで向こう側は壊せない。急遽こちら側というんで、うちの店も壊されちゃったんですよ。

だから富澤時計店は関東大震災の時と敗戦の時、二回にわたって土地を取られてしまった。

昭和二五年に再建した店がこれです。コーナードウに元平が大切に保管していたウインドウが使われています。元平は壊す時に自分で大工さん連れて見に行つて、将来店を再建する時のために大事に保管しておいたんです。

ゼンマイの時代

初めにお話したように、小田原藩の時計は分銅が動力源でした。分銅引きが掛け時計になってからゼンマイになった。祖父の時代はゼンマイ(振り子)が新しい技術だった、だからアメリカに修業に行つたと思います。

叔父の話ですと、元平が禪一丁で時計を直しているんです。当時扇風機なんかありませんから、うちわでこうやって、

俺は手が疲れちゃって……。いくらかお小遣いくれて、俺はお小遣い稼ぎにやってたんだ」と言っていました。

昔は蓄音機なんかも直していらしたんですよ。時計だけじゃやってけませんので、元平はやってたらしいんです。

ゼンマイだったら、物によっては直せる。蓄音機は昔服部時計店(今のセイコー)で昔やっていたらいいです。直取引じゃなかったですけども、何番何番のゼンマイを分けてくれって言えば服部さんが分けてくれましたんでね。

オルゴールですか？ それはちよつと聞かないですね。

子供の頃、父に「おい、ゼンマイ巻いとけよ」と言われて、高い所の時計はハシゴ使って、低い所の時計は背伸びして、ゼンマイ巻いてお小遣い貰った記憶があります。

小田原で最初の

オメガの特約店

これが船舶時計です。これより少し古くて精度がいいものが戦艦「三笠」についてました。横須賀に復元された「三笠」に展示されています。ロンジンで精度がいい。

昔はスイスの時計というのの憧れでした。特にオメガはね。



ロンジンの船舶時計

我々でもオメガの時計は扱えなかったんですよ。あの頃はヤマというか他から、大きな店から回して貰う。

国鉄さんなんか月に月賦で何十個かなんか買っていた。

それで昭和四十年頃、オメガがキャンペーンをやったんですよ。時の専務さんがおいでになって、特約店契約して下さいって。こちらのほうも願ったり叶ったりで、オメガを売らさしていただきました。勿論小田原で初めのことだった。

あの頃はオメガの時計ってのはみなさんの憧れでしたよ。昔は時計っていうのは高級品ですよ。

沖縄返還の頃ですが、お客さんが「沖縄に行くから何買つて来たらいいか」と言うので、「どうせ舶来買ってくるなら、オメガ買って下さいよ」と言いました。オメガを売らせていただいて、特約店にさしてもらった事情がありますからね。日本で買わなくても、そうすればオメガの宣伝にもなります。「へー、オ

メガってそんなにいいのけ」というわけです。だからいまだにオメガ特約店の看板が飾ってありますよ。

昭和四〇年に全国のセイコーの百貨舗ディーラに選ばれました。ベストディーラです。えーつと、いくつ売ったのかなあ。

時計屋で眼鏡を売るのは

なぜか

お客さんから「なんで時計屋さんで宝石や眼鏡を売っているのか」と聞かれます。宝石屋は宝石、眼鏡屋は眼鏡しか売らないけれど、何で時計屋さんには欲張って時計も眼鏡も宝石も売っているの。

それはね、総発売元のセイコーは時計もやっつてる、眼鏡もやっつてる、指輪もやっつてる、それでセールスが来るわけです。だから、時計屋だけが別に欲張っているわけじゃないんです。セイコーはセイコーレンズつてのをやっつてますよ。昔の岡谷

光学、あれがセイコーに吸収合併されて、セイコーブランドで眼鏡のレンズを作ったのがきっかけです。

セイコーは去年創業百三十年の記念をやりました。キングセイコーを改良したのがグランドセイコーです。

ゼンマイから電池へ

ゼンマイ時計、今でも使っている方、おいですよ。親父が使っていたとか、思い出だから何とか直してくれと頼まれますが、「お客さん、何とか動くようにしたいけど、もう部品がないから、せいぜい三日間しか持たないですよ」と言います。

戦前は一週間巻、二週間巻が主だったが、戦後に改良に改良を加えて一ヶ月巻ができた。それから二ヶ月巻というのをつくったんですけども、ゼンマイが強すぎて持たない。ですから今でも一ヶ月巻を使っている方が修理に来られることもある。文字盤に六十日と書いてあるのを見ると「ああ、もうちよつと直りません」と云います。

この間もお電話をいただいて、ゼンマイの掛け時計が朝バリバリっていう音がしたんですって。なんとかならないのと言うから調べた。ゼンマイは時計の針を動かすほう(時方)と音を鳴ら



オメガ特約店の看板が見える店先

すほう(打ち方)の二つがあるんですが、何年前に時方のゼンマイが切れたのでそのゼンマイを外して打ち方のほうのゼンマイをひっくり返して使ったことがわかった。そういうところまで使った方もおいでです。今は針を十時十分で止めて飾ってあるそうです。

札幌や川越の時計台はゼンマイ巻です。札幌の業者とかが直している。修正、修正で直している。いずれは駄目になるでしょうね。直そうとしてもそういう古い時計直す職人がいませんよ。

ゼンマイ時計は明治から始まって最近まで続き、非常に寿命が長かった。同じゼンマイでも柱時計、腕時計、自動巻が出来、小さく軽くなってきた。

ゼンマイから電池になったのは写真がフィルムからデジタルになったような変化ですね。所謂技術革新です。電池になってきたのは三十年ぐらい前からですかね。今はソーラーもあります。日進月歩ですね。

もともと、動力源が変わってもテンプとか二番車とか三番車とか、針を動かす精密な機械はあるわけです。

昔は忠臣蔵マイナス

あったが

小田原の時計屋さん、減ってますよ。多い時は四六軒ありました。毎年六月十日の「時の記念日」に神奈川時計商組合からポスターが配られます。「小田原、何枚？」って云うから「忠臣蔵マイナス」って言ったんです。小田原では大甚、それから田屋、小塩さんがあった。

だんだん、時計屋も少なくなっちゃいましたねえ。

先日、時計商組合長に「今何軒？」って聞いたら、「この間二軒抜けたから、八軒だよ。うちの親父だとか富さんとこの親父がやってた頃にはよお。四六軒なんだなあ」と言っていました。

修理を何とか直してくれと頼まれても部品がない。セイコー社に言っても、けんもほろろに、「パーツがありません」と言われちゃいます。

この前、二〇年以上前のカシオの時計を持って来たお客さんがいるんですよ。「どこ行っても電池売ってないが、何とかありませんか」ってね。そのお客さんはその時計を大事に綺麗に使ってるんです。私は、「お客さん、これは山口百恵が宣伝していた

(デジタルはカシオ)のあれでしょ。私どもでもこの電池ありませんよ」と言いました。

その時計は電波時計でメーカー修理なんです。メーカーに送ったら「内装部品なし」と書いて戻って来た。古くはないですけど、もうパーツが切れている。

ブローバーっていう時計メーカー知ってるでしょ。あれは世界に先駆けて電池時計を作ったんです。ブローバーの電池は独特の電池なんです。銀が少ないやつ。しかし、電池そのものが日本に入ってこない。それに、銀が少ないものですから、湯浅など電池メーカーが作らない。

しかし、丹念にパーツを探している方もいます。インターネッツでね。コレクターですね。

昔は二階でも仕事してましたが、今は修理はほとんどなくて電池交換だけです。ここ(二店先)でお客さんと話しながら出来ます。たまにゼンマイの修理があるときはここでやります。ゼンマイだったら、物によっては直せる。岐阜にある千賀さんだったら全て手で直してました。

新開地には行くなよ

私は新玉小学校の出身です。亡くなった父に「新開地には行くな。新開地に行かずに帰って来るんだぞ」と言われました。

そのときは意味が分からなかったです。

同級生があつたの辺にいるもんで、遊びに行くと二階からお姐さんが、おいでおいでと私に手を振っている。変だなと思ったら、後ろにいる若いお兄ちゃんに手を振っているんですね。それで新開地というところはそういうところかなと、子供心に分かりましたけどね。

つい新開地の話までしてしまいました。私の話を聞いていただき有り難う御座います。史談会さんも大変ですね。ご苦労様です。

時計の修理をしながら語る

富澤雅夫さん



遠江方面史跡めぐり

河合 多美江

前日のぐづつついた天候と異なり、ありふれた言葉ではあるが、本当に雲一つ無い快晴の朝を迎える事が出来、勇んで家を出る。定刻八時バス出発、気分は爽快だが、早朝の起床は朝に弱い私は未だ眠気が残りボンヤリバスにゆられての出発であった。

富士山。こんなにもじんの汚れもなく裾迄真白に雪に覆われた富士のお山をかつて自分は見た事があっただろうか？そして進み行く車窓から角度は変わってもその白銀の美しい姿が変わる事なく、私達の目を楽しませてくれた。

思わず手を合わせたくなる崇高な富士の姿に、隣の友人とつくづく日本に生まれて良かった事と話し合った。

白銀の富士の霊峰 輝きよ

すそ野広がり 辺りをはらう

大日本報徳社

バスは順調に掛川に入り大日本報徳社に着き、現地のガイドの懇切丁寧な説明を聞く。

明治三十六年に創設された大日本報徳社大講堂は近代和風建築として貴重で、国の重要文化財に指定されているとか。中は吹き抜けで二階棧敷をもうけていて天井が高く、それ迄は日差



大日本報徳社大講堂

しもあり暖かだったのに、説明を聞いている間の冷たく寒かった事。皆様ふるえていらした。尊徳さんは貧しくろくろく勉強も叶わなかったのに、独学で孔子の教え、四書、五経、大学迄読みこなし至誠・勤勞・分度(身の丈に合った生活)をすすめ「推譲」の教えを説いておられた。

「推譲」の教えとは、入ったお金は先ず家族に使い、残りは社会に還元しなさいと云う事、私達は日頃徳を積むように教えられているが、それを実践された徳の高い方だった事を良く学ばせて頂いた。そして如何に幼児教育、初歩の教育が大切かを感じた次第だった。

報徳の教訓はぐくむ 掛川に

推譲の精神 今も継がれて

二俣城趾

車中で美味しいお弁当を頂きやってきました二俣城趾。史談会の旅行は何時でも歩きが重要で足腰が弱いと皆様についていけないので、日頃歩く事を心掛けている積もりだが山城の道は結構大変！バスを降りて城趾への道すがら青芽をあふれさせていた一本の柳の若木に出会い心なごませてもらった。

春浅く 花も望めぬ 城趾の下

青める柳 しなやかに立つ

そしていよいよ城への道にさしかかる。城への道、特に山城への道はいつも厳しく、それでも一人も欠けずに元気に登りきられて御同慶の至りで、天守台跡の石垣の前で記念写真。この石垣は、野面積みで中は土塁創りを併用しているとの事、小じんまりとした荒けずりの中にも味のある石垣だった。撮影後、余力を出して皆で折れ曲がった石段を登り天守台跡に立つ。見下ろすと、そこにあの天龍のゆつ

二俣城趾石垣をバックにして集合写真



たりとした流れが飛び込んで来て「ああ 天龍川、ここに登って来なければこの流れはみられなかったんだ！」と感慨しきりだった。

二俣の 天守跡より 望むれば

天龍の流 日光を反ねて

方広寺

いよいよ最後の方広寺、これも長く厳しい山路を一生懸命頑張つて歩く。

方広寺について前知識がなかっただけにこんな山奥とは知らず、朱塗りの橋をわたった時にはもうヘトヘト。重厚な三門をくぐつて本堂前に進む。

建徳二年(一三七一)後醍醐天皇の皇子無文元選禪師開創と伝えられる寺で禪寺にふさわしく余分な装飾の無いすっきりとした堂々たる建物。中へ入り拝観させていただく。

工匠岩五郎の作である一本彫向拝の上り龍、下り龍の勢いある彫刻に魅せられ、お山のあちこちに立つ小さいけれどどのびやかな表情の羅漢像に心とませ乍ら回廊を一回りするときさやかな石庭に面した。勅使門でもあるのか、菊の御紋のついた閉ざされた門があり、白砂の上にきれいに箒目が広がる。

その一隅に八重の紅梅が今を盛りと咲き誇っていて、濃いピンクの色が目鮮やかにうつる。

方広寺 石庭の箒目 静として

八重の紅梅 色鮮やかに

帰りの下り坂も疲れた足には結構きつかったようだが、道了尊のような奥まった山路を陽の明るい内に下る事が出来、又参加者の皆様に怪我もなく帰途に就けた事は本当に良かった。

小田原着は二〇時を過ぎていたが、曇りの無い漆黒の夜空に月と金星と木星の天体ショウを瞬時目にする事が出来、とても楽しくラッキーな旅でした。皆様ありがとうございました。



方広寺本堂

参考

大日本報徳社(掛川市)

岡田佐平治とその子岡田良一郎が中心となって明治八年に創設された「遠江国報徳社」が基。現在でも全国の報徳運動の中核地となっている。

国指定重要文化財の大講堂をはじめ、東京霞ヶ関にあった有栖川宮邸を移設した迎徳会館、岡田良一郎を記念し建設された報徳図書館等、貴重な建築を見ることが出来る。

二俣城(浜松市天竜区)

天龍川が大きく湾曲する地であり、徳川方と武田方との間で激しい攻防が繰り返された。長篠の戦い等で活躍した大久保忠世はその功により二俣城主となった。

また、徳川家康の長男信康が織田信長に嫌疑を掛けられ、この地で自刃させられたことでも知られる。

方広寺(浜松市北区)

本堂・半僧坊真殿・三重の塔等を擁する曹洞宗の古刹。

小田原の菓子屋の隠居で幕末から明治にかけて三河・遠江に報徳を広めた福山瀧助の墓がある。

小田原史談会

比叡山延暦寺・湖東三山史跡巡りの旅 ご案内

年度予定では高野山方面でしたが、1泊ではきついとの声があり、
下記のように変更しました。みなさま是非参加ください。

日時：平成24年10月30日(火)～10月31日(水) 小雨決行

集合：10月30日(火) 小田原駅西口 午前7時出発(6時50分までに集合)

帰着：10月31日(水) 午後8時頃(予定)

旅程：第1日 園城寺(三井寺)、比叡山延暦寺など

第2日 湖東三山(百濟寺 金剛輪寺 西明寺)など

宿泊地：延暦寺会館(077-578-0047)

費用：30,000円(旅行当日、現金で集金いたします。)

受付：10月16日(火)午後1時より電話 0465-34-3939(史談会受付窓口 勝俣)で
受け付けます。(定員40名になり次第締め切らせていただきます。)

※出発時間がいつもより早いのでご注意ください。

江戸時代の小田原宿を訪ねて

五月十五日、生憎の雨模様の中、藤棚に集合し、小田原史談会理事の杉山慶一さんの説明で江戸時代の小田原宿を歩いた。

最初は筋違橋町、欄干橋町、中宿町へ。いずれも江戸時代を彷彿とさせる町名で地図から消えてしまったのが何とも残念至極。

小西薬局に立ち寄り店の歴史を当主に説明していただく。

次は現「なりわい交流館」付近で小田原宿の中心地の本町、宮前町。片岡本陣には日向内藤家他が、久保田本陣には紀州徳川家他が宿泊したとのこと。

小田原宿全体では四軒の本陣と四軒の脇本陣あり、東海道随一だったようです。

万延元年(一八六〇)片岡家に生まれた片岡永左衛門は「明治小田原町誌」を執筆、小田原の近代史研究に功績があった人で、その日記が「小田原史談」にも掲載されていた。野沢横町を通過して「籠常」に寄ったらお土産をいただいた。有り難うございます。

続いて地元の人でも殆ど知らないという龍宮神社を紹介していただく。付近はかつて漁業が盛んで漁師の人達が漁業安全・大漁祈願をした、という。

この神社は海岸近くの袋小路にあり杉山さんだからこそ知っている場所。

寛永十一年(一六三四)以前の東海道と考えられている一里塚跡を見た後、小田原提灯発祥の地、新宿へ。

一号線を西に向かって歩くと唐人町で、永祿九年(一五六六)に三浦三崎に唐人船が来着し、その一部の人を北条氏が保護し小田原に留まった、と言われていた。

三時間近く雨中を歩いて市民会館前で解散。

普段は車で何気なく通り過ぎている町並みを自分の足で歩いて学ぶ楽しさを実感した。

(松島記)



小西薬局 絵：田中 豊

平成二四年度総会 講演要旨

郷土史再発見

よもやま話

石井 啓文

小田原の剣術と剣道

小田原藩士の身分は上士から侍分↓御番帳外↓組拔之者↓組之者↓御中間の五段階でした。

小田原でのみ伝承された鏡信一刀流の三代林嘉蔵は御番帳外でしたが職務は左官頭でした。

勝海舟は小普請組(無役の旗本で城壁の修理等が職務)でした。大久保忠真が老中になって抜擢登用した川路聖謨(としあきら)も小普請組から勘定奉行筆頭になり日露和親条約を結びました。大久保忠真の嫡子忠修(ただのぶ)の教育記録である中垣謙齋・著『垂孫金城録』から、忠修の無敵流剣道免許取得もわかりました。

熊本県立図書館に平常無敵流関係三冊の古文書調査に行きました。目的の一つは復元された熊本城本丸御殿でもありました。「謁見の間」の襖絵と格天井は息をのむ美しさでした。

最近、小田原では木造天守閣復元が言われています。小田原城の本丸御殿は、將軍お成りのために造られ、城主の居館は二之丸御殿と言われます。本丸御殿復元も考えたいですね。

熊本の古文書から、牧之原市

相良さがら史料館を訪ねました。田沼意次が築いた相良城本丸跡に建つ史料館は素晴らしかった。田沼は印旛沼干拓政策の失敗から老中を辞任しますが、松平定信の個人的感情から転封、城は破壊されたのが史実のようです。しかし、四男意正(おきまさ)が相良に復帰、明治まで同家は続きました。大久保氏と似ていますね。

様斬(ためしぎりの足跡を追う)

平常無敵流創始者山内甚五兵衛と稲葉氏の関係を調べていると『稲葉家永代日記』に、「御様(おため)しに成り度き御道具(刀)有るに付き公儀獄舎極悪の者式人御所分」とあります。

こうした刑の執行者は牢屋同心の仕事でしたが、実際は代々山田浅右衛門家が請け負っていました。直木賞受賞の網淵謙鏡・著『斬』に詳しい。

山田家累代の墓を池袋の祥雲寺と四谷の勝興寺に訪ね、墓石に小説の女主人公「素傳(そで)」の刻銘を見つけ、処刑の現実味が目の当たりに蘇ってきました。江戸切絵図は武家のみが記されていますが、浪人で町人身分

であった山田浅右衛門家を記しています。將軍家御様御用を勤め、生活は上級旗本に劣らず裕福であったと言われています。

学者の書いた『江戸の刑罰』や『大江戸死体考』で『斬』の信憑性を確かめ、牢屋敷のあった小伝馬町、見せしめの刑場・鈴ヶ森や小塚原を、牧之原の時も広大なお茶畑に、坂本龍馬を斬ったと自白した今井信郎屋敷跡を訪ねました。近頃の私の旅は、史料調査の現場近くで日頃関心を持っていた史跡を訪ねることを楽しみにしています。

江戸時代の時刻と一日

古文書に書かれた時刻は、現代と同じ定時法か、日の出・日の入を明六ツ(朝六時)・暮六ツ(夕六時)とした季節により変動する不定時法かは分からない。これを確かめたく、話題のスカイツリー近くの東向島にあるセイコーミュージアムを訪ねました。一人で恐縮でしたが一時間、説明員に教えられました。

展示されている江戸時代の掛時計や櫓時計等は、どれも不定時法でした。外国製の時計も我が国流に改造していました。買

い求めた携帯用日時計も、月ごとに時刻を記す不定時法でした。こうしたことから、庶民は不定時法であったことは、ほぼ断

定できます。ただ、天文方では定時法であったと言われます。

しかし、こうした時計や携帯用日時計など、どの程度普及していたか、そうしたデータは全く分からない、と言われます。

一日の始まりにしても、天文方は現代同様午前零時(子の刻)でしたが、日の出(明六ツ)や日の入(暮六ツ)を一日の区切りとする説、さらに子之刻の始まりである夜十一時とする説もあります。庶民は日の出説が多く言われていますが、面白いことに本居宣長は、自分が死んだら月日を間違いない(午前零時説)ように言い残したと言われます。

学者たちも現代と同じ一日を承知し、定時法だったと思われるますが実体は分かりません。

漢文の読み方の基本は、二字以上の熟語は音読です。黄昏は「こうこん」が正しい読み方で、日没後、暗くなった午後八時頃です。「たそがれ」は夕暮れ時ですが、黄昏と書くのは間違いから起こったと言われています、恥ずかしながら私は「齊」は「斎」の略字と思っていました。

別字であり意味も全く違います。文字に限らず、歴史検証でも当たり前前に思っていることが、史料等から意外な落とし穴を経験しています。そのことは又の機会に……。

平成24年度

総会報告

小田原史談会

○ 日 時	平成24年5月12日(土)	13時~14時
○ 場 所	小田原市民会館	6階 第7会議室

議長 中野家孝 (史談会理事) 書記 松島俊樹 (史談会理事)

議事次第

第1号議案 平成23年度事業報告

1. 一般報告

・年間を通じて計画にそって会報「小田原史談」の定期発行、史跡巡り等の「研修活動」を実施し、ホームページの内容の充実をはかった。また、理事会では、「会報・小田原史談編集の手引」、「会報贈呈基準」、「会員管理規則(仮称)」、「会計規則(案)」の整備・検討を行ったほか、役員会の都度研修を実施した。

2. 関係団体との交流

- ・小田原市文化連盟(市文連)の加盟員として、歴史自然探訪(「埼玉県忍城・さきたま古墳群見学」)、ふるさと歴史講座(「箱根関所の再建に携わって」)などを共催した。
- ・小田原・足柄地区歴史団体交流会に参加し、「合同成果発表会」(6月開催)準備作業を行っている。
- ・小田原市民活動サポートセンター主催の「サボセン祭」に参加し「二宮尊徳の遺跡地」などを展示した。

3. 各事業委員会報告

(1) 会報委員会報告

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 225号 掲載記事「二宮尊徳と表彰」他 | 226号 掲載記事「箱根の近代化を進めた尊徳の精神」他 |
| 227号 掲載記事「小田原の再生に向けて」他 | 228号 掲載記事「箱根通関規定の特色」他 |
- ・ホームページとの連携 (詳細略)

(2) 研修委員会報告

- ・5月10日(火)総会時の講演会 「箱根の近代化を進めた尊徳の精神」～福住正兄の行動を中心にして～
箱根町立郷土資料館長 鈴木康弘氏
- ・史跡めぐり

①小田原市・南町方面史跡めぐり	5/25	参加者27名
②三重県伊勢・松阪方面史跡めぐり	10/13~14	参加者22名
③初詣 成田山新勝寺、房総風土記の丘史跡巡り	1/19	参加者31名
④遠江方面史跡巡り	3/29	参加者43名

(3) ホームページ委員会報告

- ①会報委員会と連携(会報委員会報告の通り)
- ②ホームページ委員会独自の活動を展開(大雄山線沿線史跡巡り)
- ③定期連載企画の充実「小田原の懐かしい映画館」「親父の場所は空けてある」
- ④藤沢市の「地名研究会」サークルからリンクの依頼あり承認。

第2号議案 平成23年度 一般会計報告(別項)、特別会計報告並びに監査報告

第3号議案 平成24年度 事業方針

1 基本方針

- ・時代の変化、会員の減少傾向などに対応するため、小田原史談会活動の見直しなどについて引き続き検討し、会員の求める充実した史談会活動を展開出来るよう努める。
- ・小田原・足柄地区の歴史研究団体との交流を深め、互いに成長しあいながら、地域の歴史・文化の発展に寄与する。
- ・会員の参加する研修活動を活性化する「史跡巡りの旅」等の主催、会報「小田原史談」、「ホームページ」の充実・強化に努め、会員との絆の強化をはかる。
- ・会員の漸減傾向を重視し、新規会員の増加を図る活動を積極的に行うほか、経費の節減に努める。

2. 各事業委員会の活動計画

(1) 会報委員会計画

- ① 会報「小田原史談」の定期発行(年4回)を維持する。
- ② 一般会員の調査・研究内容を発表・報告する場として「小田原史談」を提供する。
- ③ 分かりやすく、読まれる会報作りに努める。
- ④ ホームページとの一層の連携を強化する。
- ⑤ 「小田原史談」制作経費削減に努める。

(2) 研修委員会計画

- ① 講演会(総会時) 「郷土史再発見よもやま話」 きらめき☆おだわら塾 市民教授 石井啓文氏
- ② 史跡めぐり 1) 小田原宿史跡めぐり 5月15日(火) 2) 高野山方面史跡めぐり 10月
- 3) 初詣 高幡不動方面 1月 4) 伊豆・松崎方面史跡巡り 3月

(3) ホームページ委員会計画

- ① 定期連載企画の充実化を図る(「箱根登山鉄道史跡巡り」をスタート予定)
- ② 会員の方々の関心事に沿った企画検討と投稿の勧誘
- ③ 会報「小田原史談」編集との連携を強化する(ホームページ掲載記事を「小田原史談」にも掲載、等)

第 4 号議案 平成 24 年度 一般会計予算 (略)

第 5 号議案 平成 24 年度 新役員 理事 内田 滋 本多 博 山口隆夫

以上の総会議案はすべて満場一致で承認されました。

第2号議案 1.平成23年度 一般会計決算報告書

収入の部 平成24年3月31日 (単位:円)

項目	予算額	決算額	増減(Δ)	摘要
前年度繰越金	77,270	77,270	0	前年度決算繰越金
預り金	12,000	0	Δ 12,000	4名分
会費	948,000	1,005,000	57,000	会員 @3,000円
賛助会員	340,000	320,000	Δ 20,000	賛助会員会費
預金利息	100	59	Δ 41	預金利息
雑収入	5,000	16,600	11,600	「小田原史談」既刊号販売代
積立金繰入	150,000	150,000	0	総集編特別積立金 繰入
計	1,532,370	1,568,929	36,559	

支出の部 (単位:円)

項目	予算額	決算額	過・不足(▲)	摘要
総会費	45,000	37,133	7,867	総会諸費用(講師謝礼・交流会諸費)
会議費	80,000	30,874	49,126	理事会関係費
通信費	8,000	8,390	▲ 390	会議等召集連絡費
会報発送費	55,000	59,639	▲ 4,639	「小田原史談」個人会員宛発送費
交際費	20,000	18,000	2,000	関係団体負担金・祝儀 など
慶弔費	30,000	15,750	14,250	弔慰金(香典・生花・花輪代)
事務消耗品費	6,000	13,481	▲ 7,481	用紙・事務用品等費用
振込手数料	10,000	8,130	1,870	個人会員会費 振込料
宛名印刷費	3,000	4,284	▲ 1,284	会報発送名宛ラベル
ホームページ	10,000	5,520	4,480	ホームページ維持・管理費
会報印刷費	1,176,000	1,226,400	▲ 50,400	「小田原史談」(年4回発行) 印刷費
会報委員会費	5,000	0	5,000	
研修委員会費	5,000	4,215	785	研修会等資料作成費
ロッカー借用費	14,400	14,400	0	サホートセンター4基X@3,600円(年間)
雑費	3,000	0	3,000	
予備費	61,970	8,000	53,970	前払金(24年度総会会場費)
計	1,532,370	1,454,216	78,154	

平成23年度一般会計収支決算	収入	1,568,929
	支出	1,454,216
	残高	114,713

上記の通り平成23年度一般会計決算報告を致します。残高114,713円は、平成24年度一般会計予算に組み入れます。

平成24年3月31日 会計委員長代行 鳥居 泰一郎

会計監査の結果、一般会計、特別会計ともに帳簿の処理、領収書など適切に処理されていたことを報告します。

平成24年4月4日 監事 市川清司 監事 高田知予子



平倉会長挨拶



議案説明を聞く会員



石井啓文氏講演

特別賛助会員

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 熱海 アオキクリニック | 和 ^{ちとほ} 小田原城趾前 田毎 |
| 紳士服の アメリカヤ | のれんと味 まる海 |
| 税理士法人 報徳会計 | ◇ そびそ二 宮 |
| 伊勢治書店 | 茶半家具株式会社 |
| ㊦ かまぼこ | ちんまう 本店 |
| (株) オクツ 薬局 | 割烹料理 鳥かつ楼 |
| ㊧ 小田原ガス | 和菓子 菜の花 |
| 小田原報徳自動車 | 杉崎茂法律事務所 |
| かまぼこ籠 清 | 平井書店 |
| (株)カネボウ化粧品小田原工場 | (有) 古屋花店 |
| かみやま小児科クリニック | 株式会社 報徳 |
| 興電社 | 建築金物 (株)星崎仲吉商店
家庭金物 |
| 小伊勢屋 | 本多時計店 |
| (有)小松石材店 | 学生専科 丸マルク |
| COMTEC コムテック株式会社 | 曾我の権干 美の政
庭幸・かまぼこ |
| さがみ信用金庫 | (株) アルファ |

平成二十四年 盛夏
 小田原史談会 会長 平倉正
 暑中御見舞申し上げます

小田原史談会ホームページ URL: <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>
 或いは検索エンジンで「小田原史談会」と入力

落穂集

巻頭は小田原史談会創設以来の会員である岸達志様(東京院住職)に書いていただきました。今回の企画のきっかけは竹田氏の小田原訪問です。花園幼稚園・かめや旅館跡等をご案内し話を聞かせてもらいました。文豪を祖父に持つ人、とは思えぬ実直な方であることがインタビューで分かります。貴重な写真の多くは竹田氏提供の資料から転載させていただきました。

石井様の「嘉永小田原大地震：」は竹の花直下型地震に遭遇した小田原藩の被害状況が手に取るように分かります。「孝貞義鑑」は今号で親の敵万助が久しぶりに登場し敵討ち本懐に近いことを示唆しています。「初代は小田原藩の御時計師」は富澤時計店の歴史と同時に時計そのものの歴史として興味深いものです。今号も「小田原史談」をお楽しみ下さい。

編集子

「小田原史談」原稿募集

次号第二三二一号(平成二十四年十月発行)の原稿を募集します。締切は八月二十日です。論考・紀行・証言などをお寄せ下さい。お待ちしております。お問い合わせは左記へ。

小田原市南町四一―二四 松島俊樹
 ㊧〇四六五―二三一八六三三

年会費 普通会員三千円

振替

〇〇二〇二〇三二八四三三三六
 小田原史談会

小田原史談(年四回発行)

創刊昭和三十六年一月
 会創立昭和三十年七月

禁無断転載